

江戸幕府の米蔵(二)

飯 島 千 秋

はじめに

一 関東の御蔵

(一) 浅草・本所御蔵

(I) 御蔵の支配・管理

(II) 御蔵米の納渡

(III) 江戸の囲米・囲粳

(二) 浅草・本所以外の江戸の御蔵

(三) 小菅納屋(小菅御蔵、小菅御粳蔵)

(四) 今市御蔵

(五) その他の御蔵

(I) 浦賀御蔵と下田御蔵

(II) 神奈川・藤沢・三島・蒲原御蔵

二 畿内および畿内周辺の御蔵

(一) 大坂城御蔵

(I) 大坂蔵奉行

(II) 大坂御蔵米の内訳・性格

(二) 難波・天王寺御蔵

(三) 二条御蔵

(I) 二条御蔵と二条蔵奉行

(II) 二条御蔵米の内訳・性格

(四) 大津御蔵

(五) 高槻御蔵

(六) その他の御蔵

(I) 伏見御蔵と淀御蔵

(II) 永原御蔵と水口御蔵

(以上前号、以下本号)

三 各地の御蔵

- (一) 駿府御蔵
 - (二) 甲府御蔵
 - (三) 長崎御蔵
 - (四) 佐渡御蔵
 - (五) 清水御蔵
 - (六) 熱田・笠松御蔵
 - (七) 高山・古川御蔵
- おわりに

三 各地の御蔵

(一) 駿府御蔵

駿府城は、慶長十二年に完成し、同年七月三日に家康が入城するが、御金蔵や御蔵はこの時には設置されていたものと思われる（天守・本丸などは同年十二月火事で焼失のため、翌年再建）。駿府城は、寛永十二年にも天守・殿舎すべてを焼失し、同十五年に諸櫓・殿舎が再建される。おそらく御金蔵や御蔵も同様に焼失・再建されたであろう。御蔵の規模については、嘉永七年（安政元年）の地震の際に「御米蔵九棟ノ内七棟小損」とされるから、幕末期には九棟あったことがわかる。⁽³⁶⁸⁾

慶長十二年から、駿府の大御所家康と江戸の秀忠によるいわゆる二元政治が展開するが、現実には、同十六年までは駿府政権が全国の幕領支配を行い、以後江戸政権が引き継いでいる。そして、同十六年からは、全国の蔵入地のう

ち美濃・伊勢両国および近江国内一三万石の年貢米は駿府へ納められることになった。⁽³⁶⁹⁾ さらに、慶長十四年十二月、徳川頼宣に駿河・遠江国五〇万石が与えられて駿府徳川藩（駿府藩）が成立するが、家康存命中は事実上藩政の実権・財政は大御所家康に掌握されていたのである。その後頼宣が紀州和歌山へ転封となり（元和五年七月）、寛永元年八月に徳川忠長が甲斐・駿河両国、信濃国小諸、遠江国の一部など合わせて五〇万石（のち五万石を追加され、計五五万石）で入封するまでの間は松平重勝が城代として入り、駿府城は一時幕府の管理する城となった。⁽³⁷⁰⁾ そして、寛永九年十月に忠長が改易されると、駿府城は再び幕府直轄の城となり、駿府城代のもとに城内の警備にあたる駿府在番と城外の警備を担当する駿府加番とが置かれて支配体制が整えられた（駿府在番は、宝永四年・五年の二カ年中断、寛政二年六月に廃止されて同年八月以降駿府勤番に代わる。駿府加番は文久二年閏八月に廃止）。また、慶安二年十月からは城内の警備にあたる駿府定番も置かれた。⁽³⁷¹⁾

寛永九年に幕府直轄の城となつてからの駿府御蔵についてみることにする。駿府御蔵の支配・管理は、駿府城代、駿府在番の書院番頭（寛永九年から同十五年までは大番頭）、駿府定番、駿府町奉行および駿府代官に委ねられたとみてよいであろう。駿府城に貯蔵された城詰米は、駿府城代・在番の書院番頭・駿府定番・駿府町奉行に管理が命じられており、⁽³⁷²⁾ 他方、年貢米や城詰米・粃の出納は駿府代官の担当であった。駿府代官大草太郎左衛門（政修）は、嘉永七年の勘定所への提出書類に「私掛駿府御蔵詰米并御多門詰粃之儀、去ル四日之地震ニ而右場所々悉震毀」と記す。⁽³⁷³⁾ また、駿府代官は、毎月駿府御蔵納払帳を幕府勘定所に提出することとされていた。⁽³⁷⁴⁾ 駿府代官が駿府御蔵米・粃の出納を担当したことは、例えば宝暦七年十二月の「御料高、御代官并御預所高書付」の宮村孫左衛門の項に「駿府御蔵方懸り」と記されることから確認できる。⁽³⁷⁵⁾ さらに、「県令集覧」などでも、駿府紺屋町陣屋代官（駿府代官）には「御蔵掛り」

とあり、享保十九年より御蔵方御役料三〇〇俵が支給された。⁽³⁷⁶⁾ こうしたことから、駿府御蔵詰米は、基本的には駿府

代官支配地からの年貢米を主体としたと考えられる。また、慶安・承応期において、他の駿河代官支配地の年貢米が江戸に廻米されているにもかかわらず、駿府代官の年貢米の江戸廻米は行われなかった。⁽³⁷⁷⁾ 駿府代官支配地の年貢米は

駿府御蔵に収納されたとみられる。しかし、たとえば寛文元年の遠江国秋鹿代官支配地の年貢米の一部が「駿府御城米詰」として詰米されていること、天保六・七年には、伊豆斐山川代官支配地（駿河国内にも支配地を持つ）からも駿

府御蔵に詰米されていること、天保十二年には駿府代官支配地とともに遠江国中泉代官支配地（同）の年貢米が駿府御蔵に詰米されていることなどから、⁽³⁷⁸⁾ 遠江代官および伊豆斐山代官の駿河国内支配地の年貢米も必要に応じて駿府御蔵

に詰米されたことがわかる。さらに、文化十年の「三河岸仕法書控」には駿府御蔵・清水御蔵への甲州幕領米の詰米

方法が記され、天保四年「岩淵河岸仕法書」の中にも「甲州御三分様御支配所村々御年貢江戸御廻米・駿府御詰米、

岩淵河岸請取方、蒲原浜へ渡方仕法の義」とあること、天保十二年にも甲斐国支配代官の年貢米が駿府・清水両御蔵に詰米されていることから、⁽³⁷⁹⁾ 甲斐国幕領年貢米も駿府御蔵・清水御蔵に詰米されていたのであった。なお、「駿府御蔵

方懸り」となった駿府代官には御蔵手代二人（切米二〇俵三人扶持ずつ支給）・同下役二人（金五両二人扶持ずつ支給）・御蔵番一人（米三斗七升入りを七俵支給）が付属した。⁽³⁸⁰⁾

駿府御蔵には毎年一万三〇〇〇石〜一万六〇〇〇石の年貢米が納められたが、このうちから駿府在番・加番への合力米、地役人切米扶持方などが支出された。また、城詰米の詰替も毎年行われて、古米は諸渡方に使用された。駿府在番は寛永十六年正月に大番から書院番に代わり、加番も慶安四年から二加番制から三加番制に代わった（二番は大名役⁽³⁸¹⁾の加番。在番の書院番頭（一人）・同組頭（一人）・書院番士（五〇人、組頭含む）には、分限高の二つ物成（三割）の

合力米が支給され（交代月である十月から翌年九月まで十二カ月、閏月は十三カ月に割合月々渡り）、書院番与力（二〇騎）には分限高の一つ七分五厘物成（一割七分五厘）が米で同様に月々支給された。また、同徒同心（二〇人）には分限高に関係なく現米一石五斗二人扶持が支給された（現米は五月・十月の二度、扶持は月々渡り）。一方、加番には、高一万石につき四〇〇人扶持が月々渡りで支給されたが（二万石以上も一万石の役高で支給、以下の場合は一万石につき四〇〇人扶持の割合で支給⁽³⁸²⁾）、天保十四年以降は高にかかわらずすべて二〇〇人扶持の支給となった⁽³⁸³⁾。

駿府在番が寛政二年六月に廃止されて、同年八月には駿府勤番に代わったことは前述したが、駿府勤番は、組頭一人（役料三〇〇俵）のもとに勤番士三〇人（寛政三年六月以降、それまでは二〇人）・与力八騎・同心二〇人が付属した。そして、勤番組頭以下は駿府城代の支配を受けたが、勤番士は駿府在住で任期がなかったため、合力米は支給されなかった⁽³⁸⁴⁾。慶応二年の記録では、「寛政度在番相止、其後御加番御廃老々年払米老万俵余相減候」とあるから、在番・加番の廃止は、単に制度上・幕府財政上の問題にとどまらず、駿府町方にとっては物価・経済問題であったのである。

駿府城に貯蔵された城詰米についてみてみよう。延宝四年・貞享四年の規定高によると、駿府御蔵には米一万石が貯蔵されることになっていた⁽³⁸⁵⁾。詰米が始められた時期は不明であるが、寛永九年の「甲州申之御成ケ御勘定目録」からは甲州中郡筋より浅草御蔵とならび駿府御蔵へも米が移送されていたことがわかる⁽³⁸⁶⁾。同年に駿府城が幕府直轄の城となったこと、さらには翌年に將軍家光の上洛をひかえていたことなどを考え合わせると、駿府城の城詰米は寛永九年に始まったと推定することが可能であろう。なお、明暦期には明確に確認でき、同二年の駿府城代、駿府在番の書院番頭、駿府定番、駿府町奉行への下知状には、「御城米之儀、入念手置可申付候、相定員数老万石之儀不足無之様ニ常々改置へき事」とある⁽³⁸⁸⁾。これに関して、享保十五年の記録には、「御城詰米之儀、古来より老万俵宛相詰り候間、向

後も「壹万俵詰置可申」とある。⁽³⁸⁸⁾これは、駿府城代酒井下総守(忠隆)が幕府勘定所に対し、下知状では御城米一万石を詰め置くようにとあるが実際には一万俵が詰められてきた、この点いかに取り計らうべきか、と伺いを出した、その伺いに対する回答である。なお、伺書では、元禄年中に三〇〇〇俵が江戸に回送され使用されたこと、その後は七〇〇〇俵の詰米であったこと、享保十五年から三〇〇〇俵の詰足しを命じられたこと、などそれまでの経過についてもふれている。その後、延享二年の勘定所「御勝手方勤方」では、「定式御囲米三千五百石有之、年々新米を以詰替、古米は渡方に罷成候」とある。⁽³⁹⁰⁾また、同年の「御勝手向御用定」では、駿府御蔵の囲米(詰米)が米三五〇〇石であったとし、「年々御年貢米壹万六千石程駿府御蔵江相納候内、本文之石高御囲米ニ仕置」とある。⁽³⁹¹⁾しかし、寛延四年(宝暦元年)の「諸国御詰米」では、再び「壹万石 駿河御城」と記される。同年の「駿府下知状」でも、「相定員数壹万石、不足無之様可致置事」と記される。⁽³⁹²⁾一方、宝暦末年から明和初年頃の「駿府御蔵御詰米之事」には「米三千五百石 御囲米」とある。⁽³⁹³⁾さらに、天保十四年の「御囲籾大豆有高」には、「駿府御囲籾」に関して「元高七千石」とある。⁽³⁹⁴⁾駿府城詰米は、清水御蔵と同じく寛政元年に籾詰に変更されたが、その詰籾規定高が籾七〇〇〇石(米に換算して三五〇〇石)であったのである。

以上のことから、(一)駿府御蔵の城詰米は、詰米高が当初は米一万石と規定されたが、実際に詰め置かれたのは一万俵つまり米三五〇〇石(寛政元年以降は籾七〇〇〇石)であったこと、(二)しかも、元禄年間から享保十五年までは七〇〇〇俵(およそ二四五〇石)の詰米であったこと、(三)享保十五年に一万俵までの詰戻しが命じられ、延享二年時点では実現していたと考えられること、(四)寛延四年(宝暦元年)の詰米高「壹万石」との記述は、従前の規定を踏襲したための混乱と思われること、などが明らかになったといえよう。なお、量は不明であるが、駿府城詰米は天明

三年には江戸に回送されたといわれている。⁽³⁸⁵⁾ 後述するように文政八年にも江戸に回送されたが、天明三年の場合は、関東・東北・信州地域での凶作による幕府年貢米の収納不足に対応した措置であろう。

寛政元年、駿府・清水両御蔵の城詰米は粳詰とするよう命じられたが、「海道筋甲州村々御物成米之内を以、五ヶ年ニ割合粳納可仕」とあるように、⁽³⁸⁶⁾ 粳は甲州幕領から納入された。そして、享和元年時点での駿府・清水両御蔵の合計詰粳高（城詰米高）は粳九八八石余であった。その後詰戻しがなされて、両御蔵の詰粳高は合計で二万石となった。しかし、文政八年には、そのうちから粳九一六五石が江戸浅草御蔵へ回送され、⁽³⁸⁷⁾ 天保八年にも飢饉に際して清水御蔵から御救米が支給されたりした結果、⁽³⁸⁸⁾ 両御蔵の詰粳高は合計二一〇〇石余にまで減少した。天保十年から同十四年にかけて毎年粳三〇〇〇石ずつ五カ年で計一万五〇〇〇石が詰め戻されて、天保十四年十一月時点での詰粳高は、駿府御蔵が粳七八〇〇石余、清水御蔵が粳九三〇〇石余となった。⁽³⁸⁹⁾ なお、文久元年十月晦日時点での駿府・清水両御蔵の城詰米は合計粳三〇八九石余であった。⁽⁴⁰⁰⁾

その後の城詰米の貯蔵状況については明らかでない。文久二年閏八月に、將軍上洛に備えての年貢米・囲米（城詰米含む）回送計画が作成されるが、そこでは、駿府御蔵の城詰米は緊急の場合東海道宿々手当米に当てられることになっていた。しかし、これが実際に実行されたかどうかは不明である。また、慶応二年六月・八月・十月の三回にわたって、駿府城代・定番・町奉行が米価高騰・夫食差支えを理由に駿府・清水両御蔵詰粳一万五〇〇〇俵の払米を幕府老中に願い出て、最終的には同年十月に一万俵が認められた。⁽⁴⁰¹⁾

なお、前述したように、駿府加番は文久二年閏八月に廃止された。そして、慶応二年十二月には駿府定番も廃止された。⁽⁴⁰²⁾ したがって、これ以後は駿府城代と駿府勤番、駿府町奉行、駿府代官が城詰米の管理を含む駿府御蔵の支配・

管理を行ったのである。しかし、慶応四年二月十日に、元治元年七月以来駿府城代の職にあった田中藩主本多紀伊守（正訥）は、東海道先鋒総督府より駿府城の警守を嚴重にするよう命じられるとともに、同月十六日には沼津藩主水野出羽守（忠敬）・岡崎藩主本多美濃守（忠民）の兩人にも田中藩の応援が命じられた。⁽⁴⁰³⁾駿遠両国の各藩は二月上旬までには新政府に恭順の意を示しており、駿府御蔵は、この頃にはすでに幕府管理の御蔵としての実体を失っていたものと考えられる。

駿府城は、慶応三年十月十四日の徳川慶喜の大政奉還以後、幕府の解体と天皇新政権の全国統一の中で徳川宗家の居城として再登場することになった。慶応四年閏四月二十九日、田安亀之助（徳川家達）に徳川家相続が認められ、五月二十四日には駿河国府中城主として駿河一円ほかで七〇万石の領地を下賜する旨伝達された。当時駿府城は駿府城代の田中藩主本多紀伊守によつて管理されていたが、同年七月二日、駿府城は田中藩から徳川家（大目付河田相模守貫之助、勘定奉行加藤丹後守餘十郎・福田作太郎、目付中台信太郎）に引き渡された。また、駿河・遠江両国の幕領は、駿府代官田上寛蔵が県令となつて支配を続けていたが、これも同年七月六日に引き渡された。幕府目付梶清三郎の駿府探索書「駿州久能山并駿府表之形勢書」（慶応四年五月）によると、「同所（駿府）御城内御囲米金共、江府え御廻し相成候、残之分不残官軍方にて滞留中米金共引出し候ニ付、当時囲用意ハ無之由」（括弧内は引用者）とある。⁽⁴⁰⁴⁾ところが、慶応四年五月から十二月までの駿河府中藩（静岡藩）の財政帳簿・米方収入中に、「静岡城詰米、朝廷と御引渡之分」として四五九石二斗が記載される。⁽⁴⁰⁵⁾同年九月一日に駿府紺屋町陣屋御蔵と詰米七九一石が新政府に引き渡され、⁽⁴⁰⁶⁾徳川家ではその貸与を願い出て許可されているので、⁽⁴⁰⁷⁾おそらくこの一部が該当すると思われる。駿府御蔵は、幕府解体後は駿河府中藩（静岡藩）の御蔵として新たな役割を担っていくことになるのである。

(二) 甲府御蔵

甲府御蔵は、慶長五年頃には完成したといわれる甲府城にあったが、御蔵の数や規模を記録した史料は以外と少ない。しかし、一八世紀以降については断片的に知ることができる。享保九年の記録では、鍛冶曲輪に御米蔵五戸前(棟数不明、一戸前は四間四方)、曲輪内の「青沼町口御門之内」に三棟一三戸前(二棟は五戸前、一棟は三戸前)があったとある。そして、鍛冶曲輪御米蔵詰所の看板の「定」には「御蔵にて御切米御扶持方請取輩不作法仕へからず、并御蔵役人江対し雑言申へからざる事」などの三カ条が示されていたとされる⁽⁴⁰⁸⁾。また、甲府代官元締手代の「諸事書留」からは、甲府城の城詰米は城内御蔵へ納め、詰替による古米や切米扶持方渡のための米は「御代官御預り之御蔵」に詰め置かれたことがわかる⁽⁴⁰⁹⁾。

天保八年四月には、城内鍛冶曲輪御蔵から下府中町々名主共買請米五〇〇俵(前年十月買入れ、御蔵へ預け分)が渡されている⁽⁴¹⁰⁾。また、嘉永二年の「懷宝甲府絵図」には、柳門の外に「御米蔵」があったことが記される。元治元年の「甲府城内外修復一件」にも、「柳御門外御米蔵六番より拾番迄一棟八天保四巳年御修復」とある⁽⁴¹¹⁾。さらに、天保九年には城中清水曲輪に清水御蔵が設けられ、慶応二年にも「穀仲買共、去ル八日清水御蔵米三百俵拝借被仰付」とある⁽⁴¹²⁾。したがって、幕末期には少なくとも鍛冶曲輪御蔵、柳門外御蔵、清水御蔵の三カ所の御蔵があったことがわかる。なお、先の享保九年の記録にみえる「青沼町口御門之内」の御蔵は、「御米蔵脇二百二十間之馬場・馬見所モ有之」とあり⁽⁴¹³⁾、他方、嘉永二年の「懷宝甲府絵図」では、柳門外御蔵に隣接して馬場があることから、両者は同一のものと考えられる。

甲府城は、城代支配(慶長六年二月〜同七年十二月)・城番支配(慶長十二年閏四月〜元和二年九月、寛永九年十月〜寛文元年閏八月)をはさみつつ、徳川義利(義直)(慶長八年正月〜同十二年閏四月)、徳川忠長(元和二年九月〜寛永九年十月)、

徳川綱重・綱豊父子（寛文元年閏八月～宝永元年十二月）、柳沢吉保・吉里父子（宝永元年十二月～享保九年三月）によって支配された。享保九年三月に柳沢吉里が大和郡山に転封されたあと、甲斐一国は幕領となり、享保九年七月四日より甲府城は甲府勤番支配によって守衛されることになった（慶応二年八月五日以降は甲府城代が任命されるが、城代松平右京亮輝照の入甲はなく事実上甲府勤番支配が守衛⁽⁴⁴⁾）。甲府勤番支配は、老中支配であり、遠国奉行の筆頭の地位におかれた。役高は三〇〇〇石、役知（役料）一〇〇〇石であった。追手支配と山手支配とに分かれて各一人が任命され、配下にそれぞれ勤番士一〇〇人（組頭二人を含む）・与力一〇騎・同心五〇人ずつが所属した⁽⁴⁵⁾。組頭の役料は三〇〇俵である。なお、甲府勤番支配は、文久二年七月九日に一人役となったが、その後二人役、一人役と目まぐるしく変化し、慶応元年五月二十六日には三度目の二人役となった⁽⁴⁶⁾。そして、慶応三年六月十日には甲府小普請組支配（一人役）と改称されて、慶応四年三月十七日まで存続している⁽⁴⁷⁾。

甲府御蔵は、前述のように享保九年以降幕府の管理するところとなるが、以下、同年以降の甲府御蔵についてみることにする。甲府御蔵には年貢米一万石程が毎年遣方米として納入された。そして、このうちの一八〇〇石（五〇〇〇俵）を囲米（翌年詰替、古米は切米扶持方などの渡方に加える）とし、残りは甲府勤番や地役人の切米扶持方等に使用したのである⁽⁴⁸⁾。享保九年の時点では、一万石の年貢米は、甲府代官支配地から四〇〇〇石、上飯田代官支配地・石和代官支配地からそれぞれ三〇〇〇石ずつが納入された。また、嘉永七年には、甲府・市川・石和の各代官所・当分預所より、四七二〇石、二四七〇石、一六五五石六斗三升余がそれぞれ納入されたのであった⁽⁴⁹⁾。

甲府城の城詰米については、勘定方の伺書に「甲州御城詰米ハ、員数御差図次第御城内御蔵江詰置、有馬出羽守・興津能登守御預りいたし、年々新米出来候節、御代官と詰替可然奉存候」（享保九年）、甲府勤番支配への「条々」に「御

城米之儀、入念手置可申付之、高五千俵相詰、不足無之様ニ可改置事」(天明八年)とあることから、⁽⁴²⁰⁾城詰米は基本的には甲府勤番支配が管理したといえる。しかし、御蔵詰米納払の際の御蔵封印は、勤番士の立会衆(甲府勤番支配の追手・山手から勤番士一人ずつが「御蔵立会」に任命された)と甲府代官が合封印したのであり、⁽⁴²¹⁾城詰米の出納・詰替も甲府代官の担当であった。また、甲府御蔵の詰米を含む毎月納払帳面は甲府代官が幕府勘定所に提出したことなどから、⁽⁴²²⁾甲府御蔵は、事実上甲府代官の支配・管理に委ねられていたといえよう。甲府代官は「甲府御蔵掛り」とされ、役料二〇〇俵が支給された。⁽⁴²³⁾そして、御蔵の見回りなどの警備は、勤番与力・同心・御小人や甲府勝手小普請(寛政元年九月創設)が担当したと考えられる。また、緊急時には、近隣の村方に警備のための馳付人足が甲府代官から課せられたのであった。

なお、享保九年に、甲府代官奥野忠兵衛は、甲府勤番の「御切米御扶持方渡方御用」も勤めなければならぬとして御蔵手代三人(切米二〇俵三人扶持ずつ)・同下役三人(金五両二人扶持ずつ)召抱えの許可を願い出ている(御蔵番は甲府勤番同心が勤めるとしている)⁽⁴²⁴⁾。『甲斐国志』に「御蔵方手代上役三人、下役三人付属ス」とあるから、⁽⁴²⁵⁾認められたことがわかる。

非常用の備蓄米である城詰米は享保九年から詰められるようになった。⁽⁴²⁶⁾宝暦元年の「諸国御詰米」には五〇〇〇石と記されるが、これは五〇〇〇俵もしくは一八〇〇石の誤りである。なお、宝暦末年から明和初年頃の「甲府御蔵詰米之事」では米一八〇〇石となっている。⁽⁴²⁷⁾そして天保十四年の「御囲籾大豆有高」では甲府御蔵の詰籾が記載されなくなっている。天明三年末あるいは同四年には、甲府御蔵の詰米が江戸に送られたといわれるが、⁽⁴²⁸⁾この時、あるいはその後、⁽⁴²⁹⁾すべて使用されてしまったことが考えられる。なお、文久元年十二月晦日時点での甲府御蔵の保有米(遺方残

米および新年貢米であつて、翌年の「御遣方元ニ立候分」は一万三四七七石余であつた。⁽⁴²⁰⁾

元治期以降の甲府御蔵の支配・管理に関連する事柄をみておこう。元治元年三月に、甲府勤番支配の甲府町方兼務が廃止されて、福田甲斐守(道昌)が新たに甲府町奉行で甲府代官兼帯を命ぜられた。これによつて福田甲斐守は甲斐国一〇万石余を支配することになったのであるが、同時に甲府御蔵も支配・管理することになった。元治元年五月に、勘定奉行・同吟味役より「甲府町奉行福田下総守儀、御代官兼帯同所御蔵掛被仰付候ニ付、御代官并御蔵ニ付候儀ハ外御代官同様相心得」るべき旨の達しがあつた。⁽⁴³⁰⁾そして、同人には諸入用として一カ年金八〇〇両・扶持方一二〇人扶持が支給されることになったが、これらは甲府御金蔵、甲府御蔵から勘定奉行・同吟味役裏判手形をもつて春秋冬三度に支払われた(同年分は、郷村請取の翌月より月割で支給)⁽⁴³¹⁾。慶応元年になると、五月十三日に甲府町奉行が廃止されることになり、同職にあつた小田切愛之助(直道)は甲府代官兼帯を御免となつた。そして、町方は甲府勤番支配が治め、代官は旧来通り任命されることになった。甲府代官には小笠原甫三郎(義利)が任命されている。慶応二年八月には、甲府町奉行が再置され町方支配にあたるとともに、甲府城代も置かれた。甲府町奉行には若菜三男三郎が、甲府城代には高崎藩主松平右京亮(輝照)がそれぞれ就任した(松平輝照の甲府着任はなかつた)⁽⁴³²⁾。

慶応四年になると、二月二十四日に、東海道先鋒総督府は甲府城代支配の役人を総督府に召集した(同日甲府代官中山誠一郎は恭順の意を記した書付を提出)。そして、総督府は甲府小普請組支配の佐藤駿河守(信崇)と甲府町奉行の若菜三男三郎に命じて仮に甲府城を管守させた(三月三日まで)。さらに、二日後の二十六日には、土佐藩士黒岩治部助(直方)を甲府に派遣して動静を探らせるとともに、米蔵・金蔵の貯蔵状況を調査させた。また、三月四日には高島藩兵を先導として東海道先鋒鳥取・土佐二藩の前軍が甲府に入り、甲府城と城内の兵器をその管理下に置いた(翌日督府参謀

板垣退助が後軍を率いて甲府に入り、甲府町奉行所の米穀を市民に賑給し、甲府代官中山誠一郎を仮に甲府町奉行兼帯とした。⁽⁴³⁾
甲府小普請組支配は三月十七日まで、甲府城代は六月二十九日に真田信濃守(幸民)が職を免ぜられるまで続いているが、幕府による甲府御蔵の支配は、慶応四年の三月上旬には終焉したとみてよいであろう。⁽⁴⁴⁾

(三) 長崎御蔵

長崎御蔵が創建された年については不詳である。しかし、近世初頭以来長崎が幕府直轄となり、対外交渉窓口として重要な地位を占めていたこと、慶長十六年段階で長崎の人口が一万五〇〇〇人(元和二年には二万四六〇〇人余、万治二年には四万七〇〇人余)を数えていたことなどを考えると、⁽⁴⁵⁾慶長末年から元和期頃には近隣幕領の年貢米を保管する御蔵が設けられていたことが十分に予想される。また、寛文九年には肥前国彼杵郡・高来郡の幕領年貢米の長崎廻米が行われているので、⁽⁴⁶⁾この頃に御蔵があったことは確実である。

長崎の御蔵が明記される記録に、延宝三年に船番屋敷地内に御用米蔵が建てられ、船番二人に蔵方加役が命じられたというものがある。⁽⁴⁷⁾その後、享保四年七月には、瀬崎に御用米蔵が新たに建造され、土蔵三棟が建てられた(総地坪数一五六一坪、一〇戸前)。また、翌五年八月には、十善寺村にあった天草代官の御米蔵二棟(総地坪数二七五・五坪、三戸前)を「長崎地方御用米蔵所」として長崎奉行支配の町年寄の管理下に置き(同九年からはこれまでの瀬崎御蔵所を北瀬崎御蔵所、十善寺村の御蔵所を南瀬崎御蔵所と呼称)、さらに、同十一年九月には、船番屋敷の地内にあった土蔵二棟(五戸前)を北瀬崎御蔵所地内に移したのであった。⁽⁴⁸⁾

これらの南北両瀬崎御蔵には、延享期にはおよそ一万七、八〇〇〇石ほどが詰米されるようになっていた。延享二

年の「御勝手向御用定」に「米壹万七千石程 長崎御蔵詰 是ハ前々より豊後国御物成五千石、天草御料御年貢米不残相廻候処、其以後豊後米五千石相増、都合書面之石高程年々相廻、二千石程ハ長崎奉行御役料其外諸渡方ニ罷成、残米御払ニいたし代銀ハ銀座江相渡し、江戸御金蔵江相納御遣方ニ罷成候」とあり、また、同年の勘定所「御取箇方勤方」には、「長崎廻米高御代官并御預所役人へ割賦之事 是は、例年壹万七、八千石程、長崎へ為諸渡米相廻候、右高之内肥後・肥前御預所御物成米年々大概七、八千石程相廻、其外西国御代官より米壹万石（マカ）づゝ相廻、都合壹万七、八千石程充割賦仕候事」とある。⁽⁴³⁾ここから、豊後米・肥前米・肥後米など合わせて一万七、八〇〇〇石が長崎御蔵に納められ、そのうちから長崎奉行役料ほかの諸支出二〇〇〇石程を除いた分が払米され、代銀が江戸御金蔵に納められたことがわかる。なお、御蔵納米が不足した際には、筑前米・筑後米が買納された。

長崎御蔵は、明和二年になって長崎市中の新地に御蔵所（米蔵三棟一〇戸前、総地坪数三七二坪）が新たに設けられた。これは、前年に島原藩戸田因幡守（忠寛）の御預所豊前国下毛郡から年貢米三八〇〇石（明和二年より四〇〇〇石となり、同国宇佐郡の代官揖斐十太夫政俊支配地と一年交代で廻米、同五年に戸田因幡守支配御預所返還のため揖斐十太夫支配地からのみの廻米となり、さらに翌六年豊後米に振替になる）、石見国内三郡（代官川崎平右衛門定孝支配地）から四〇〇〇〇石の合計七八〇〇石（44）と八〇〇〇石が新たに長崎に廻米されるようになったのにもない、それらの年貢米を収納するためのものであった。⁽⁴⁴⁾この廻米は、「長崎廻米之方御益に付」との理由によるものであり、⁽⁴⁴⁾長崎廻米によつて輸送経費節減を図るための措置であつた。なお、宝暦三年には、長崎における払米などの代銀納入先が江戸御金蔵から大坂御金蔵に変更になった。⁽⁴⁴⁾

表12に長崎への廻米割賦高を、表13には寛政四年の時点における収納米の使途内訳をまとめた。ここから長崎御蔵収納米の産地および長崎御蔵の果たした機能・役割の一端を探ってみよう。表12からは、（一）寛文期から長崎廻米が

表12 長崎御蔵廻米割賦高

割 賦 米	割 賦 高	備 考
肥 前 米	1,000石余	寛文九年～, 肥前国彼杵・高来郡より
肥 後 米	7,000石余	延宝四年～, 肥後国天草郡より
豊 後 米	5,000石	享保18年～, 御囲米用, 豊後国日田・玖珠郡より
豊 後 米	5,000石	元文3年～, 豊後国日田・玖珠郡より
豊 前 米	4,000石	明和元年～, 豊前国下毛・宇佐郡より, 同6年に豊後米(日田・玖珠郡)に代わる
石 見 米	4,000石	明和元年～, うち1,500石は享和元年から肥前国松浦米(松浦郡)に, 2,500石は文化4年から豊後米(日田・玖珠郡)に代わる
筑 前 米	620石余	文政2年～, 筑前国怡土郡より
合 計	26,620石余	

(註) 中野等「幕府年貢米の長崎廻送をめぐる諸問題」(丸山雍正編『幕藩制下の政治と社会』所収)に掲載の表をもとに、「御米蔵」(長崎県立図書館蔵「金井八郎翁備考録」第六下)などにより一部補正した。なお、明和元年から豊前米4,000石となっているが、同年は3,800石、翌年から4,000石となる。また、石見米4,000石のうち、2,500石分は文化4年3月に豊後米に代わることになったが、実質的には同年暮廻米分からの変更となる。

始まり、延宝期には肥前米(肥前国彼杵郡・高来郡、南瀬崎御蔵に収納)・肥後米(肥後国天草米)がそれぞれ一〇〇〇石余、七〇〇〇石余であったこと(表13にあるように、両所からの廻米は年によって増減があり、肥前米は八〇〇石余、一〇〇〇石余、肥後米の場合は六〇〇石余、八〇〇石余であった)⁽⁴³⁾、(二)享保十八年から囲米分として豊後米五〇〇〇石が(長崎凶年之節地下人共御救之為)ということを開始、そしてさらに元文三年からも五〇〇〇石が廻米されるようになったこと(「北瀬崎入用米」にあてゐるためのもの)、(三)明和元年から始まった豊前米の廻米が、同六年からは豊後米の廻米(豊後国日田郡・玖珠郡、開始時は郡代揖斐十太夫支配地から)に、同じく明和元年から始まった石見米四〇〇〇石のうちの二五〇〇石が、享和元年に肥前国松浦米の廻米(松浦郡、開始時は代官高木作右衛門忠任支配地から)に、二五〇〇石が文化四年に豊後米の廻米(豊後国日田郡・玖珠郡、開始時は郡代羽倉権九郎秘球当分預所から)にそれぞれ

れ代わったこと、⁽⁴⁴⁾(四)文政二年から筑前米六二〇石余の廻米(筑前国怡土郡、開始時は代官高木作右衛門忠任支配地から)が開始されたこと、⁽⁴⁵⁾(五)文政二年の時点での長崎廻米総高は二万六六二〇石余(うち豊後国からは一万六五〇〇石)であつたこと、⁽⁴⁶⁾などがわかる。なお、慶応期には、「豊後国日田郡・玖珠郡村々御年貢米之内、定式壺万八千石宛長崎御詰米相成申候、尤両郡熟談之上御詰米割合方は、日田郡其年柄御物成米・長崎御詰米定石数之内え皆納、不足は玖珠郡より相納、同郡残石は其年に寄江戸・大坂両所之内え御廻米之積取計来申候」と記され、⁽⁴⁷⁾豊後国の割賦高は一万八〇〇〇石に達していた。長崎廻米総高は慶応三年五月には二万一〇〇〇石に減ぜられたといわれるから、⁽⁴⁸⁾その八五%が豊後国日田・玖珠両郡から廻米されたことになる(年柄により一部を筑前米・筑後米で買替納)。

一方、表13からは、寛政四年の時点で二万六〇〇〇石余の廻米があり、このうち肥前米(彼杵郡・高来郡)・肥後天草米各一〇〇〇石の計二〇〇〇石余が長崎奉行所役人および地下諸役人の切米扶持方渡米に、豊後米・石見米合わせて四四〇〇石が定式払米に、そして残りの一万九六〇〇石が「北瀬崎入用米」にあてられたことがわかる(豊後国からの廻米のうちから囲米された五〇〇〇石は南瀬崎御蔵に収納されたが、新米詰替後は、払米や「北瀬崎入用米」にあてられた)。肥後天草米は、寛延三年までは、長崎奉行所役人および地下諸役人の切米扶持方にあてられる一方、残米は入札により払米されてきたが、宝暦元年より残米はすべて長崎会所買入れとなり「地下諸役人借渡米」などにあてられるようになったのである。この長崎会所買入れとされた米は「北瀬崎入用米」と呼称されたが、南瀬崎御蔵および新地御蔵の米であつても同様の呼称が用いられた。「北瀬崎入用米」とは、奉行所入用米、町年寄取替米、会所調役・町年寄貸米、地下諸役人・寺社拝借米、唐人糶米・拝借米、長崎会所・俵物役所飯米、助成米、御救米、臨時唐人被下米などの諸渡米をいい、代銀は長崎会所が立替上納して大坂御金蔵に納めた。そして、のちに回収された代銀が会所に納入

表13 長崎御蔵廻米割賦高・使途内訳

(寛政4年)

産 出 地	割 賦 高 (納 入 者) ・ 使 途 内 訳		
肥 前 米 肥 後 米 (天 草 米)	1,000石余	高木菊次郎納	納高増減あり
	7,000石余	松平主殿頭預所納	納高増減あり
	{ 2,000石……………切米扶持方渡分 天草米6,000石程…北瀬崎入用米に引受分 (11・12月の長崎市中天草米相場平均に 銀60匁につき2匁の増銀値段で代銀上 納)		
豊 後 米	14,000石	揖斐造酒助納	
	{ 5,000石……………北瀬崎入用米に引受分(元文3年より廻 米の分) (11・12月の長崎市中豊後米相場平均に 銀60匁につき2匁の増銀値段で代銀上 納) 5,000石……………御囲米(享保18年より廻米の分) { 2,400石……………定式御払米 (新穀廻着後, 10・11・12月に800石ずつ 長崎市中入札払米し, 代銀上納) 2,600石……………北瀬崎入用米に引受分 (10・11・12月の定式払米値段平均を以 って代銀上納) 1,000石……………定式御払米 (7・8月に500石ずつ長崎市中入札払米 し, 代銀上納) 3,000石……………北瀬崎入用米に引受分 (7・8月の定式払米値段平均を以って 代銀上納, 但し, 市中米払底で臨時払米 の際は, その分北瀬崎入用米引受高減 少)		
石 見 米	4,000石	菅谷弥五郎納	
	{ 1,000石……………定式御払米 (7・8月に500石ずつ長崎市中入札払米 し, 代銀上納) 3,000石……………北瀬崎入用米に引受分 (7・8月の定式払米値段平均を以って 代銀上納, 但し, 市中米払底で臨時払米 の際は, その分北瀬崎入用米引受高減 少)		
割賦高合計		26,000石余	
使途内訳合計		{ 切米扶持方渡 2,000石余 定式払米 4,400石余 北瀬崎入用米 19,600石余	

(註) 「御米蔵」(長崎県立図書館蔵「金井八郎翁備考録」第六下)により作成。

されたのである（地下諸役人・寺社拝借米などは、役料銀のうちから代銀取り立て）。「北瀬崎入用米」のうち肥後天草米・豊後米計一万一〇〇〇石余は、十一月・十二月の長崎市中における米の平均相場に銀六〇匁につき二匁の増銀を加えた値段で、また、囲米されていた古米二六〇〇石を含む計五六〇〇石の豊後米と石見米三〇〇〇石は、それぞれの定式払米の平均値段で代銀が上納されている。⁽⁴⁴⁹⁾

表13にみられた寛政四年の収納米の使途内訳は、基本的には幕末期まで変化がなかったといえる。安政元年の長崎御蔵収納米は二万七六〇〇石余で、その内訳は、肥前米一〇〇〇石余（高木作右衛門忠知納）、肥後米八〇〇〇石余（池田岩之丞季秀納）、豊後米一万六五〇〇石（同人納）、松浦米一五〇〇石（同人納）、筑前米六〇〇石余（同人納）であった。そして、二〇〇〇石余（肥前米すべてと肥後米一〇〇〇石分）を奉行所役人等への切米扶持方渡、八四〇〇石余を定式・臨時払米、一万七二〇〇石余を「北瀬崎入用米」にあてたのであった。⁽⁴⁵⁰⁾ なお、切米扶持方渡米は、前述のように肥前米に加えて肥後天草米の一部が使われたが、文政二年からは、肥前米・肥後天草米に限定せず長崎廻米のうちをもつて品質を見計らい渡されることになった。切米扶持方渡高は、延享二年の記録におよそ二〇〇〇石とあるが、寛政四年、安政元年も同じく二〇〇〇石余、文久元年の場合が一九五八石五斗であった。⁽⁴⁵¹⁾

「長崎瀬崎御米蔵天保十亥年元払御勘定目録」の内容を示した表14から同年の納渡状況をみてみよう（この勘定帳は、天保十五年十二月に高木作右衛門忠篤によって勘定仕上がなされたものである）。⁽⁴⁵²⁾ まず天保十年の納方としては、前年度からの繰越米九〇八石余のほか天保九年の高木作右衛門代官支配地・同当分預所、西国郡代寺西藏太（元栄）支配地、唐津藩小笠原佐渡守（長和）預所からの年貢米（また、同十年分年貢米のうち御蔵納済分を含む）三万八九八一石余、斗出目米四八六石余など合計四万三八〇石余・銀一〇貫目余があった。なお、寺西郡代支配地からの天保九年年貢米のうち四六二五石は筑前米・筑後米の買納であった。また、銀納分は、払米代銀などへ賦課された「懸包賃銀」のほか散米

表14 長崎御蔵納渡状況

(天保10年)

石高・銀高	種類	内 容	備 考
466.7590	肥後米	天保8年高木代官所当分預所年貢米同9年中諸渡残米	
441.7440	豊後米	天保8年寺西代官所年貢米同9年中諸渡残米	
7,671.4800	肥後米	天保9年高木代官所当分預所年貢米(7,281.080石同9年蔵納済分、390.400石同10年蔵納済分)	
1,096.1600	肥前米	天保9年高木代官所年貢米	
16,500.3850	豊後米	天保9年寺西代官所年貢米(2,745.385石豊後米同9年蔵納済分・9,130.000石同10年蔵納済分、1,182.820石買替納筑前米同10年蔵納済分、3,442.180石買替納筑後米同10年蔵納済分)	
1,500.0000	肥前松浦米	天保9年小笠原佐渡守預所年貢米	
626.8500	筑前怡土米	天保9年高木代官所当分預所年貢米	
6,597.2000	肥後米	天保10年高木代官所当分預所年貢米の内蔵納済分	
1,096.3900	肥前米	天保10年高木代官所年貢米蔵納済分	
3,893.0000	豊後米	天保10年寺西代官所年貢米の内蔵納済分	
486.8344		斗出目米(天保10年正月～12月迄諸渡方の節斗出目米合計)	
4.1700		改差出米(天保10年正月～12月迄廻米水場の節改差出米合計)	
實 匁分厘毛		散米9石(天保10年正月～12月迄諸請取方の節散米入札払)	
銀 234.5.2.2		納筵代(天保9・10年年貢米の内10年中蔵納の俵高へ懸ケ取立候分)	
銀 1.472.3.6.6		懸包實銀(払米代銀および平均値段を以て諸渡方に相成候代銀へ懸ケ取立候分、銀1貫目に付10匁宛)	
銀 8.835.0.7.5			
合計 米 4,0380石9斗7升2合4勺・銀 10貫541匁9分6厘3毛			
337.1505	肥後米	實 匁分厘毛 代銀 30.454.8.0.5	天保8年高木代官所当分預所年貢米の内64.4835石は切米扶持方に渡し、残り北瀬崎入用米に渡分

渡	400.3998	豊後米	代銀 34. 33.9.8.3	天保 8 年寺西代官所年貢米の内北瀬崎入用米に渡分(天保 9 年10/10・11/13・12/ 4 入札私の平均値段上納)
	5,008.2135	肥後米	代銀 672.803.4.0.2	天保 9 年高木代官所当分預所年貢米の内2,172.1315石は切米扶持方に渡し、残り北瀬崎入用米に渡分
	5,000.0000	豊後米	代銀 676.850.0.0.0	同年寺西代官所年貢米の内北瀬崎入用米に渡分
	800.0000	豊後米	代銀 45.600.0.0.0	同年同代官所年貢米の内5,000石瀬崎御蔵へ納置、10年の廻米を以て詰替。 9 年10/12商人入札私上納分
	1,600.0000	豊後米	代銀 98.400.0.0.0	同年同代官所年貢米の内、 9 年11/27・12/ 8 商人入札私上納分の合計
	2,260.4280	豊後米	代銀 135.625.6.8.0	同年同代官所年貢米の内北瀬崎入用米に渡分 (10/12・11/27・12/ 8 入札私の平均値段上納)
	1,400.0000	豊後米	代銀 91. 0.0.0.0	同年同代官所年貢米の内、 9 年 7 /11・ 8 /16商人入札私上納分の合計
	547.3638	豊後米	代銀 35.578.6.4.7	同年同代官所年貢米の内北瀬崎入用米に渡分 (7 /11・ 8 /16入札私の平均値段上納)
	1,151.0622	買替納筑前米	代銀 71.365.8.5.6	同年同代官所年貢米の内、 9 年 8 / 8 商人入札私上納分
	3,401.5740	買替納筑後米	代銀 235.797.5.8.8	同年同代官所年貢米の内、 9 年 6 / 7・ 6 /17・ 6 /28・ 8 / 8 商人入札私上納分の合計
方	400.0000	肥前松浦米	代銀 26. 0.0.0.0	同年小笠原佐渡守預所年貢米の内、 9 年 7 /11・ 8 /16商人入札私上納分
	1,086.3345	肥前松浦米	代銀 70.611.7.4.3	同年同預所年貢米の内北瀬崎入用米に渡分 (7 /11・ 8 /16入札私の平均値段上納)
	200.0000	筑前怡土米	代銀 13. 0.0.0.0	同年高木代官所当分預所年貢米の内、 9 年 7 /11・ 8 /16商人入札私上納分の合計
	407.6000	筑前怡土米	代銀 26.494.0.0.7	同上のうち北瀬崎入用米に渡分 (7 /11・18/16入札私の平均値段上納)
小計 米 24,000石1斗2升6合3勺 此代銀 2,263貫615匁7分1厘1毛				
		銀 800. 0.0.0.0	堀伊賀守・徳山石見守・金井伊太夫・近山藤四郎・林平八郎・萩原鉄之進	
		銀 1,473. 63.1.5.2	阿部遠江守・徳山石見守・金井伊太夫・近山藤四郎・高尾学之丞・神谷	

渡方	62.5200	伊織	戸川播磨守扶持方 (24人扶持一倍、260日半分)
	27.2400		田口加賀守扶持方 (24人扶持一倍、113日半分)
	61.9500		高木作右衛門代官所諸入用米、42人扶持354日分74.340石の内手付3人の扶持分は御省略中に付差引
	17.7000		高木作右衛門代官所当分預所諸入用米 (10人扶持354日分)
	26.6250		高木内蔵丞扶持方 (15人扶持355日分)
	16.2500		原田又四郎長崎表引越在勤中10人扶持325日分
	40.0000		平林貞之助切米 (4斗入100俵、天保10年1カ年分)
	10.3000		平林貞之助扶持方 (10人扶持206日分)
	12.3200		牧民介扶持方 (7人扶持一倍、176日分)
	8.1900		河久保忠八郎扶持方 (7人扶持一倍、117日分)
	19.8300		御普請役4人扶持方 (3人扶持一倍宛延日数661日分)
	17.7500		長崎会所調2人役扶持方 (役扶持5人扶持宛延日数710日分 (10年3/朔日～11年2/晦日迄355日×2人))
	122.5000		後藤市之丞・高嶋四郎太夫・高嶋作兵衛・高木清右衛門・薬師寺宇右衛門切米合計 (3斗5升入70俵=24.5石宛、天保10年1カ年分、24.5石×5人)
方	44.3750	伊織	後藤市之丞・高嶋四郎太夫・高嶋作兵衛・高木清右衛門・薬師寺宇右衛門扶持方合計 (5人扶持355日分宛 (10年3/朔日～11年2/晦日迄、8.8750石×5人))
	106.5000		町年寄4人扶持方 (15人扶持宛延日数1,420日分 (10年3/朔日～11年2/晦日迄355日×4人))
	49.7000		長崎糸割符宿老4人扶持方 (7人扶持宛延日数1,420日分 (10年3/朔日～11年2/晦日迄355日×4人))
	17.7500		長崎会所目付2人扶持方 (5人扶持宛延日数710日分 (10年3/朔日～11年2/晦日迄355日×2人))

26.6250	長崎会所吟味役 3 人扶持方 (5 人扶持宛延日数1,065日分 (10年 3 /朔日 ～11年 2 /晦日迄355日×3人))
106.3350	長崎会所吟味役並・同助・請私役20人扶持方 (3人扶持宛延日数7,089日 分)
44.3750	阿蘭陀方通詞目付・大通詞 5 人扶持方 (5 人扶持宛延日数1,775日分 (10 年 3 /朔日～11年 2 /晦日迄355日×3人))
15.9750	阿蘭陀方大通詞助・小通詞 3 人扶持方 (3 人扶持宛延日数1,065日分 (10 年 3 /朔日～11年 2 /晦日迄355日×3人))
53.2500	唐方定直組立合・通詞目付・大通詞 6 人扶持方 (5 人扶持宛延日数2,130日 分)
26.6250	唐方大通詞・同助・小通詞 5 人扶持方 (3 人扶持宛延日数1,775日分)
10.5000	向井雅次郎切米 (3 斗 5 升入30俵、天保10年 1 ㊦年分)。
3.5500	向井雅次郎扶持方 (2 人扶持355日分 (10年 3 /朔日～11年 2 /晦日迄355 日))
106.5000	御船船頭役 2 人・水主10人扶持方 (船頭役10人扶持宛延日数710日分・水 主 4 人扶持宛延日数3,550日分)
154.0000	遠見番22人切米 (3 斗 5 升入20俵＝7 石宛、天保10年 1 ㊦年分、7 石× 22人)
294.6500	遠見番22人・水主30人扶持方 (遠見番触頭 2 人ハ 3 人扶持宛延日数710日 分、触頭 1 人・同助 1 人・遠見番18人ハ 2 人扶持宛延日数7,100日分、水 主30人ハ 4 人扶持宛延日数10,650日分)
140.0000	唐人屋敷門番20人切米 (3 斗 5 升入20俵＝7 石宛、天保10年 1 ㊦年分、 7 石×20人)
71.0000	唐人屋敷門番20人扶持方 (2 人扶持宛延日数7,100日分 (10年 3 /朔日～11 年 2 /晦日迄355日×20人))
490.0000	船番町使28人被下置米。正徳 5 年相増船番町使28人 (3 斗 5 升入1,400俵、 天保10年 1 ㊦年分)

10.6500		異国通詞 2人扶持方 (3人扶持宛延日数710日分 (10年3/朔日～11年2/晦日迄355日×2人))
14.0000		高木作右衛門手代米方懸り 2人切米 (3斗5升入20俵 = 7石宛、10年1カ年分、7石×2人)
7.0800	銀	高木作右衛門手代米方懸り 2人扶持方 (2人扶持宛延日数708日分)
	銀	春徳寺合力米 (白銀20枚被下置候分、天保10年1カ年分)
	銀	瀬崎御蔵内敷筵その他小買物代のうちへ渡 (散米払代銀を以て渡)
659.5777		欠米 (天保10年正月～12月迄諸渡方の節欠米)
1,792.8703		天保11年へ越米 (天保9年年貢肥後米、天保10年中諸渡方残り)
103.3730		天保11年へ越米 (天保9年年貢豊後米、天保10年中諸渡方残り)
6,598.3000		天保11年へ越米 (天保10年年貢肥後米、天保11年へ越米の分)
1,096.6050		天保11年へ越米 (天保10年年貢肥前米、天保11年へ越米の分)
3,893.5050		天保11年へ越米 (天保10年年貢豊後米、天保11年へ越米の分)

渡方合計 米 16,380石8斗4升6合 (内2,236石6斗1升5合は御切米・扶持方、659石5斗7升7合7勺は欠米、13,484石6斗5升3合3勺は翌年越米)

銀 2,274貫157匁6分7厘4毛 (内2,273貫63匁1分5厘2毛は御金蔵納、1貫94匁5分2厘2毛は諸渡方)

(註) 「長崎瀬崎御米蔵天保十亥年元弘御勘定目録」(九州大学・九州文化研究所蔵「元山文庫」)より作成。渡方小計は米24,000石1斗2升6合3勺となるが、史料では米24,000石1斗2升6合4勺となっている。表中の10/10などは10月10日の略(以下同じ)。

入札払代、納筵代などであった。一方、渡方として二万四〇〇〇石余を北瀬崎入用米や商人入札払米として放出し(米方納分の約六〇%)、代銀二二六三貫目余を得ている。そして、この代銀および前記一〇貫目余の納入銀は大坂御蔵に納

められたのであった。⁽⁴³⁾ 渡方では、このほか長崎奉行二人への扶持方や長崎代官所入用米、鉄砲方・勘定方・普請役・長崎会所調役・長崎町年寄・糸割符宿老・遠見番・唐人屋敷門番など長崎奉行支配向諸役人への切米扶持方として二二三六石余を支給し、差引一万三四八四石余が次年度に繰り越されたのであった。

長崎会所の中における「北瀬崎入用米」の位置を確認しておこう。「北瀬崎入用米」は、会所会計の中では「御米代」と記されるが、寛政六年の長崎会所の予算書によると、「御米代」は収入全体の約一〇％に過ぎない。八五％をこえる圧倒的部分は唐蘭貿易（とりわけ唐船貿易）による収益であった。一方、「御米代」上納分は、支出全体の九％（長崎外町等の地子銀、「例格上納金」一万五〇〇〇両などを含む幕府への上納分は全体の一五％）にとどまった。さらに、天保十年から同十二年の決算においては、「御米代」は収入全体の六〇九％に過ぎなかった。「御米代」上納分については、滞納分の上納なども合わせた単年度支出でみても全体の八一二％程であった。⁽⁴⁴⁾

つづいて長崎御蔵の管理体制をみてみよう。初期の管理体制は不明な点が多いが、長崎代官末次氏が長崎外町（四三町、寛文十二年以降五四町）および長崎・浦上両村に加え、寛文九年からは肥前国彼杵・高来両郡六カ村を兼管した。末次氏について、「都合七千六百九十八石の地域を支配し、その地子年貢物等をもって、幕府御用物の調達、奉行所諸経費や与力同心の扶持米の給付等の事務を管掌した」とされるので、⁽⁴⁵⁾ 末次氏が失脚し、長崎代官が廃止される延宝四年以前は長崎代官が御蔵の管理を行っていたものと思われる。そして、延宝四年以降安永九年までは長崎奉行支配の長崎町年寄（米方掛り町年寄）が御蔵の管理を担当したのである。長崎町年寄には「長崎三カ村御地方并寺社方支配」⁽⁴⁶⁾ が命じられており、地方御用に関しては勘定奉行の指揮を受けることとされていた。⁽⁴⁶⁾ その後、天明元年になって、長崎代官で町年寄（御用物方兼務）の高木作右衛門（忠興）に米方・寺社取計掛りが命じられ、以後御蔵の直接的管理は

同人に委ねられることになった。すなわち同年以降、これまで町年寄のもとで行われていた瀬崎御米蔵元払仕上勘定や長崎廻米の受取書である納札の発行など、御米蔵に関わるすべての業務が高木作右衛門に移管されたのである。⁽⁴⁵⁷⁾なお、高木作右衛門には米方掛りの手代二人(切米二〇俵二人扶持、受用銀七五〇目ずつ支給。受用銀は長崎会所より受取)や書物役二人のほか、⁽⁴⁵⁸⁾瀬崎御米蔵預一二人・南瀬崎御米蔵番一〇人・北瀬崎御米蔵番一二人などが付属した。

御蔵米の搬入・搬出は仲使が、御蔵米の出納立会・御蔵の警備は町年寄手代・瀬崎御米蔵預・御米蔵番がそれぞれ担当した。仲使は一四、五人おり、彼らには仲使賃銀が支給された。⁽⁴⁵⁹⁾瀬崎御米蔵預・御米蔵番については、慶応元年には、瀬崎御米蔵預頭取二人・同御米蔵預九人・同御米蔵預見習一人、南瀬崎御米蔵番小頭一人・同御米蔵番九人、北瀬崎御米蔵番小頭二人・同御米蔵番小頭助一人・同御米蔵番九人・同御米蔵番見習一人、新地御米蔵番一六人がいたことが判明する(このほか北瀬崎筆者二人・同米見二人・同米見見習一人・同小使五人・同升取二人、南瀬崎小使二人、高木作右衛門御米掛り手代二人、米方掛り附書物役二人などがいた)。⁽⁴⁶⁰⁾そして、瀬崎御米蔵預頭取・同御米蔵預、御米蔵番小頭をはじめ南北両瀬崎御米蔵番は日々米蔵に出勤して取締りにあたったが、南北両瀬崎御米蔵番には夜中の見回りも義務づけられた(文化四年時点では、南瀬崎御蔵は南瀬崎御蔵番のうちから昼二人・夜三人、北瀬崎御蔵は北瀬崎御蔵番のうちから昼三人・夜四人、新地御蔵は南北両瀬崎御蔵番のうちから昼二人・夜四人)。

新地御蔵地内には、寛政三年から始まった「長崎市中之もの手当用意備置」の御囲糶蔵もあつた。⁽⁴⁶¹⁾この御蔵には幕領年貢米が納入されたわけではないが、新地御蔵地内に置かれていたので少し説明を加えておこう。寛政二年九月、長崎奉行水野若狭守(忠通)は受用八朔銀の三分の一(銀高一六貫四四三匁五分六厘余)を囲米・囲糶買入資金にあてるために長崎会所に提供した。そして、同年十月には西築町築地一一一〇坪のうち七二八坪余を囲糶蔵地に定め、翌三年正月には、輸入品元値先買特権の一つである奉行調物元代のうち銀二〇貫目分の荷物について(水野若狭守忠通と永

井筑前守直廉より銀各一〇貫目分を引分け)、これを会所で売り立てて、その益銀で近国より粳・米を買い上げ、粳米・粳粳する旨を布達したのであった。その後、この御粳蔵は、肥前大村藩からの粳買入を契機に、寛政十二年に新地御蔵内に移築された。粳米・粳粳のための資金は「御粳米方銀」とよばれたが、寛政五年に「御粳米方銀」のうち銀一〇〇貫目が大村藩に貸し付けられた。そして、文化六年以降は柳川・唐津・平戸・鹿島・小倉の各藩にも貸し付けられ、この利銀も粳米・粳粳のための資金とされたのであった。なお、長崎奉行調物元代からの引分けは文化八年までで、その後は中止された。粳米・粳粳高の正確な数値は把握できないが、文化四・五年には松浦郡・大村・長崎村三カ所からの粳一八〇九石余を非常御備粳とする一方、小城藩より玄米五〇〇石を買い入れて粳米とするなどしている(文化十一年以降粳米された小城藩からの玄米二〇〇石は文政六年まで詰替が行われたが、その後は詰替がなく同十一年に払米された)。また、幕末期には、粳蔵は二棟で、唐津・柳川・大村の各藩からの買入米や肥前米・肥後米、粳など四〇〇〇石が収蔵されていたとされる。

以上のように、長崎御蔵には、近世中期以降は豊後米を中心に肥前米・肥後米などが収納され(豊前米・石見米も時期により収納)、切米扶持方、払米、「北瀬崎入用米」などに使用された。寛文・延宝期は、寛文三年の長崎大火後の市街再建、同十二年の市法貨物商法の実施とあいまって、新たな役職の新設や増員など行政機構の整備がすすみ、「地役人職制整備上における一つのピークをなし」たといわれる。⁽⁴²⁾ 寛文九年、延宝四年から始まった肥前米・肥後米の長崎廻米が、初めから切米扶持方に使用することを目的としたものであったかどうかは不明であるが、こうした状況に対応したことは確かである。なお、宝永五年の切米扶持方支給分は一六八〇石余であり、銀高に換算して役料銀総額の〇・五%程度であったが、その後元文期以降になると扶持方給付を受ける地役人も増加し、寛保元年には八〇〇〇石、天保期から慶応元年にかけてはおよそ三〇〇〇石(慶応三年には、長崎会所買入米による支給分と合わせて一万三一九〇石

余)となったといわれる⁽⁴⁶³⁾。一方、払米については、寛政四年においては長崎廻米高の一七%で、四四〇〇石余に過ぎない。しかも、二四〇〇石余は備米として新穀廻着までは南瀬崎御蔵に囲い置かれた。また、二〇〇〇石は七・八月に払米されたが、これは端境期の米価高騰を抑制する意味があったものと思われる。必要に応じて臨時の払米も行われたが、長崎の米穀需要を満たすというにはほど遠い状況であった。例えば、寛政期の長崎の定住人口はおよそ三万一〇〇〇人前後と考えられるが、この頃「長崎壺ヶ年飯米拾万五千石程」であったといわれる⁽⁴⁶⁴⁾。したがって、市中町人の米穀需要を満たすためには、九州一円を中心とした諸藩蔵米・納屋米の長崎廻米と売却が必要不可欠であったのである。

宝暦期以降の長崎瀬崎御蔵の中心的な機能・役割は、「北瀬崎入用米」にあつたといつてよいであろう。「北瀬崎入用米」の内容は前述したとおりであるが、それは長崎奉行所・長崎会所等の諸役所必要米の供給と町年寄・地下諸役人への助成・救済に他ならない。そして、後者の点は、唐蘭貿易と異国船警備にかかわる諸役人・市中町人への代償的な意味合いがあつたものと思われる。市法貨物商法の実施以後、地下諸役人を含む市中町人への貿易利銀配分慣行は既得権化しており、元禄十一年の長崎会所設立(幕府による貿易の「官営」化)後も変わりがなかった⁽⁴⁶⁵⁾。長崎の地役人数は、時期により増減がみられるが、宝永五年には一七四三人(延べ人数、元禄十六年人口比で住民二八人に一人の割合)、享保六年には一八〇一人、天保九年には二〇六九人(延べ人数、同年人口比で住民一三人に一人の割合)であつた。一方、この間の役料銀支給総額には著しい増減がなかった(おおよそ三二〇〇貫目〜三四〇〇貫目⁽⁴⁶⁶⁾)。「北瀬崎入用米」は、地下諸役人への実質的な役料抑制に対する反対給付としての役割も果たしたと考えられる。

慶応四年一月十八日、土佐藩士佐々木高行(三四郎)・薩摩藩士松方正義(助左衛門)は長崎奉行所に入り、肥前・筑

前以下一三藩の藩士と謀り会議所を置いて内外の事務を管理した。そして、同月二十五日には澤宣嘉が参与兼九州鎮撫総督・外国事務総督に任命され、さらに、二月二日には長崎裁判所が設置されて九州鎮撫総督澤宣嘉がその総督兼務を命じられた。⁽⁴⁸⁷⁾長崎代官高木作右衛門(忠知)以下諸役人は、二月十六日以降改めて長崎裁判所総督より旧来通りの役職に再任されているが、⁽⁴⁸⁸⁾高木作右衛門支配の下にあった長崎御蔵は、慶応四年の一月下旬から二月上旬にかけて幕府御用を果たすための御蔵としてはその役目を終えたのである。

なお、慶応四年の「辰四月申送書」(「豊後国日田郡役所・申送書」)によると、同年豊後国日田・玖珠両郡からの長崎廻米のうち、六六七三石二斗六升七合は筑後国右馬丞浦で海船に積み替え、日田郡分の一九二三石は長崎御蔵納め、残りは船積みのまま高木作右衛門手代に引き渡しの予定であるとしている。⁽⁴⁸⁹⁾明治元年の長崎御蔵納渡の実態は不明であるが、長崎御蔵は同年五月四日以降長崎府によって支配・管理されていく(明治二年六月二十日長崎県が成立)。

(四) 佐渡御蔵

佐渡金山で知られる佐渡にも御蔵(米蔵)が置かれた。佐渡相川金銀山は文禄年間に採掘が始められたといわれているが、田中清六(家康の代官として慶長五年から佐渡に派遣される。同八年失脚)の後を継いだ大久保石見守(長安)支配時代の慶長十一〜十三年頃には、すでに相川諸港の一つ大間港の番所に御蔵二棟が建てられていた(うち一棟は、越後出雲崎の廻船業者の橘屋重右衛門に預けられた)。そして、御蔵には諸役人へ支給する扶持方米や商人・鉱山労働者などへの飯米にあてるために買い入れた他国米(越後米や出羽庄内米など)が貯蔵されていた。⁽⁴⁹⁰⁾「佐渡国略記」によると、元和七年になると、相川左門町にそれまでの御蔵(一棟、五間に七間)に加え新たに御蔵一棟(七間に一四間)が建てられ

るとともに、大間町の御蔵二棟が修復された。⁽⁴⁷¹⁾さらに、承応二年頃には、佐渡国内から徴収した年貢米や他国買入米を収納するための御蔵として、山之神愛宕町に二棟(四戸前)、須灰谷に六棟(五七六坪)、石切町に一棟(五間に一二間)、上相川に一棟(五間に二五間)(万治二年に修復)、大間町に橘屋重右衛門預けの一棟(買い入れた最上米を貯蔵)、水金町四丁目日本町弾誓寺向に一棟・同浜町に二棟(この三棟は須灰谷へ移転)、下戸に三棟があった。また、このほか鹿伏にも棟数は不明だが御蔵があり、柄杓町にも「御米蔵有之由」とされる。⁽⁴⁷²⁾

一方、「御米蔵御用向取扱廉書」によると、文政十一年の段階では、山之神御蔵四棟八戸前(総地坪九三三坪余、三棟は寛政二年・同六年・文化元年建替、一棟は寛政十一年新規建造)、須灰谷御蔵四棟八戸前(総地坪一〇一六坪余、寛政元年・同五年・同八年・同九年建替)、下戸御蔵五棟一〇戸前(総地坪八四〇坪、四棟は寛政四年・同七年・同八年、文政六年建替、一棟は寛政十二年新規建造、一棟は戸前数不明であるが御蔵の建坪から二戸前と推定)、雑蔵谷粃蔵二棟(土蔵作り、文化五年・同八年新規建造)と、他国払いや大坂廻米にあてる米を収納するための御蔵として大石御蔵一棟三戸前(総囲延長七七・五間、寛延四年建造、享和三年建替)、河原田御蔵一棟三戸前(総囲地坪九〇〇坪、安永二年建造)、夷湊御蔵二棟五戸前(総囲地坪四七二坪、安永八年建造)があった。⁽⁴⁷³⁾なお、相川御蔵とは、このうち山之神御蔵・須灰谷御蔵・下戸御蔵の総称であり、大石御蔵・河原田御蔵・夷湊御蔵の三御蔵は在三カ所御蔵とよばれることがあった。⁽⁴⁷⁴⁾

こうした御蔵は、宝暦三年二月までは佐渡奉行およびその配下の役人が管理した。⁽⁴⁷⁵⁾寛永期には米蔵奉行衆や米蔵衆がおかれて御蔵の管理にあたったが、⁽⁴⁷⁶⁾米蔵奉行が少なくとも元禄初年まで置かれていたことは、勘定吟味役で佐渡奉行兼帯の荻原近江守(彦次郎・重秀)が元禄四年六月に佐渡諸役人に指示した条目のうちに、「米蔵江者、米蔵奉行并手明役之内三人相詰可被申候」とあることから確認できる。⁽⁴⁷⁷⁾また、正徳四年の「諸役人勤方帳」には、「御米蔵役役人

六人」とあり、御米蔵役が蔵米の収納・売却などを担当していたことがわかる。そして、御米蔵役には御蔵番（御米蔵番）六人（一カ年に印銀一〇〇目ずつ支給）、小揚七人（一カ年に印銀七〇目ずつ支給）が付属した。⁽⁴⁷⁸⁾ なお、文政期になると、御蔵番は、山之神・須灰谷・下戸の各御蔵にそれぞれ二人、三人、三人の計八人がいた。そして彼らには給米一人扶持ずつ、給分として一カ年錢二貫五〇〇文ずつが支給され、そのほかに払米一カ月一石ずつの買請が認められた。さらに、小揚も二〇人（小揚頭二人・同助二人・同当分助二人・小揚一四人）おり、彼らには給分一カ年八一二文一貫八九二文が支給された（合計二三貫二〇文）。なお、小揚頭・同助には払米一カ月一石ずつ、小揚頭当分助・小揚には同五斗ずつの買請が認められた。⁽⁴⁷⁹⁾

宝暦三年に佐渡支配の機構改革が行われ、地方支配に関する事柄が老中支配の佐渡奉行から勘定奉行支配の佐渡代官に移管された。そして、これにともなって、佐渡の御蔵は佐渡代官の管理に委ねられることになった。佐渡代官には藤沼源左衛門（時房）と横尾六右衛門（昭平）が任命され、二人の代官は同年七月手代一人ずつと普請役その他の諸役人を率いて佐渡に渡った。蔵方は藤沼代官の支配となり、御蔵の管理は、江戸より引き連れてきた手代や普請役二人・御蔵方二人とともに地役人の御米蔵定番役（三人）・御米蔵役（四人）が担うことになった。⁽⁴⁸⁰⁾

ところが、宝暦六年四月佐渡に赴任した石谷備後守（清昌）は、佐渡奉行と代官の併置が佐渡支配に混乱を引き起こしているとして代官廃止の方向を打ち出すとともに、佐渡奉行の一人制（佐渡在任）および佐州往還御用向の勘定奉行引受、佐渡蔵奉行の新設などを幕府に建言した。佐渡奉行一人制および佐州往還御用向の勘定奉行兼帯は実現しなかったが、その代わりとして宝暦八年三月には佐渡奉行支配組頭が創設され、青木彦九郎（長貴）と野村忠助（有直）の二人が佐渡に派遣されることになった。一方、佐渡蔵奉行の設置については、少し時期が遅れたが実現し、同十年十一月以降御蔵は佐渡蔵奉行の管理に移された。さらに、代官については、同九年に一代官が廃止され、明和五年には

残る一代官も廃止されたのであった。

宝暦十年十一月二十四日に佐渡蔵奉行となつたのは中山源蔵(利及)であり、勘定からの役替であつた。佐渡蔵奉行には役料現米四〇石、役金七〇両、ほかに引越料七〇両が支給された。⁽⁸⁾中山源蔵には勘定野田弥一兵衛(政啓)と普請役二人が立会として添えられ、地役人とともに御蔵の管理や蔵米の出納にあたつた。しかし、明和七年五月七日、佐渡蔵奉行であつた谷田又四郎(正則)が金奉行に転出し、以後佐渡蔵奉行が廃止された。そして、その後御蔵は再び佐渡奉行の直接支配となつて、同支配のもとで組頭二人が御蔵の管理にあたることになつたのである。

文政十一年の時点では、山之神・須灰谷・下戸の各御蔵は、佐渡奉行支配組頭に支配・管理され、御米蔵定番役五人(役扶持として五人扶持支給)、御米蔵役助三人の合わせて一七人が出納の任にあたっている。また、大坂廻米用の米などを取り扱う大石・河原田・夷湊の各御蔵(在三カ所御蔵)については、広間役(一人)、戸前封印の立会・御米蔵定番役(一人)・同並役(一人)・御蔵番(二人)・小揚頭(一人)・小揚(三人)がそれぞれ出役して収納や廻米を行つた。⁽⁹⁾なお、御蔵番・小揚は御米蔵定番役支配であつた。

御蔵への年貢米納入は、諸渡高を見積もり、相川御蔵納高と在三カ所御蔵納高を決定し、幕府の承認を得て始められた(佐渡奉行による決済を経て、割賦伺いが幕府勘定所に提出された)。例年九月下旬から始まり、十二月中旬頃までに七割方が納入されて、残りは三月中旬までに皆納された。御蔵米の払定日は月によって異なつたが、正月の場合は十一日・十三日・十八日・二十三日・二十六日であり、十八日は定扶持・役扶持・給米その他諸手形の払日であつた。払米の当日は、組頭二人のほか御米蔵定番役二人、同並役などが出て御蔵の開封をした。戸前上封は御米蔵定番役二人の印形、内封は組頭二人と御米蔵定番役二人の連符印がなされていたのでこれを切り解いた。払米値段は、相川・小木・河原田・夷湊・新潟・出雲崎六ヶ所の平均相場であつたが、文化十一年から相川市中の払日毎の平均値段を基

準として、その相場の一割安・二割安と決められた。払米高は年々増減があったが、寛政十年からは一カ年一万六四七九石余と決められ、文化十四年には五一七石増しの一万六九九〇石余まで許可されるようになった。

御蔵に関する諸用向は、御米蔵定番役一人・御米蔵役一人が月番となつて取り扱つた。また、江戸には上納金銀宰領・御蔵勘定仕上等のため、山方役一人、御金蔵定番役・御米蔵定番役のうちから一人（寛政二年までは各一人）、地方役より一人の計三人からなる江戸詰役人が派遣されて、幕府勘定所や在府佐渡奉行との連絡・交渉にあたつた。

佐渡の御蔵に収納された米は、同国内年貢米および他国からの買入米であつた。慶長く元和期は佐渡金銀山の最盛期で相川町の人口はおよそ四万人前後であつたといわれ、彼らが必要とした飯米は年貢米（慶長五年の本途納高は一万八七〇〇石、元和七年の年貢高二万二三五八石）のみでは不足した。⁽⁴⁸⁴⁾そこで越後国や出羽国などから米を移入したのであつた。金銀山経営にとつて米の安定的供給（価格を含めて）は何よりの重大関心事であつたといえよう。そして、寛文・延宝期には佐渡の年貢米高は二万四〇〇〇石前後（銀納分や金銀山入用・切米扶持方分を除くとおよそ一万八〇〇〇石前後が米納された）であつたが、この頃の相川町の人口はおよそ一万人で米消費量は一万五〇〇〇石く二万石と見積もられた。このように米納高と相川町需要とがほぼ見合つたものであるにもかかわらず、「佐渡国略記」に「寛文十戌年地方米三万俵、亥十二月江戸本船町米屋半兵衛買請、翌子四月他国払三致」とあるように、⁽⁴⁸⁵⁾寛文十一年には佐渡御蔵詰米の他国払いが認められ、実行された。地払米価格と他国払米価格との差益獲得が目的と考えられる。そして、延宝四年には前年の年貢米のうちの五〇〇〇石が江戸に廻米された。この時は半分ほどが濡米となつて、その分は銀納となつた。銀納値段は佐渡での払米値段一石五〇匁より高い一石五二匁とされた。天和元年まで六年間毎年五〇〇〇石の江戸廻米が行われたが、佐渡農民の要求により天和二年から廻米は中止され、五〇〇〇石分は佐渡田方銀納値段をもつ

て納めることになった（元禄元年に銀納も中止⁽⁴⁸⁶⁾）。

その後しばらくは、年貢米は相川御蔵詰と地払いというかたちが続いたが、享保十六年に古米在庫量の増加を理由に再び年々五〇〇〇石の他国払いが認められた⁽⁴⁸⁷⁾。この背景には、二つの要因があったと考えられる。一つは、元禄三年末から佐渡奉行兼帯を命じられた勘定吟味役荻原重秀の年貢増徴策である。佐渡の元禄検地は同六年から始められたが、この結果、年貢高は元禄三年の二万三〇二一石余から四万五八七石余へと一・七六倍増加したのであった。その際田方年貢の半分だけを米納とし、残り半分と畑方年貢は銀納とし、銀納分については米相場の半値でよいとした。この政策によって、農民は年貢納入のために米の販売を余儀なくされたのであり、その量は佐渡全体ではおよそ二万石にのぼったといわれている（なお、享保九年からは鉱山の疲弊により農民の貨幣取得が困難になったとして、田方年貢をすべて米納とする代わりに総年貢高の四分の一を軽減した⁽⁴⁸⁸⁾）。また、もう一つは、享保四年からの定免制の導入である。これによって米の安定的収納が確保されたのであり、しかも定免切替のたびに一〇〇石〜二六〇〇石の年貢増徴が行われたのであった⁽⁴⁸⁹⁾。

他国払いの廻米は、はじめは大石湊だけで行われたが、大石まで米を運送することは農民負担が大きいことから、安永二年に河原田、同八年に夷湊に御蔵が建てられ、両所からも廻米が行われるようになった（河原田御蔵は、文政末年頃から廻米用としては使われなくなった）。大坂廻米は、大坂戎嶋町廻船御用達古屋久兵衛の請負により宝暦十三年から始められ（同年は試しに五〇〇石の廻米）、翌明和元年には一万三四〇〇石が、同二年には一万四〇〇〇石が大石湊から船積みされるなど本格化した。寛政二年からは請負に筑前屋五兵衛が加わり、また後には佃屋勘左衛門・加納屋次郎作・広島屋平四郎が加わるなどしている。そして、大坂廻米は慶応期まで続いた。廻米高は時期によって増減があ

表15 佐渡奉行支配地年貢納入状況

(天保12年)

高 132,548.8520石 佐渡国	
此収納 米 36,383.7903石	
金 7,860両2分・銀12匁1分7厘1毛・銭16,108貫344文	
渡 方	内 訳
米 207.2537石	寺社除米渡
55.3121	廻米廻駄賃運賃渡
317.2200	在詰役人切米扶持方・役扶持
266.2000	在詰地役人当寅年御切米扶持方・役扶持の分置米
200.0000	浦方御備向御囲米
750.0000	御囲米半分正米納広恵倉渡の分
1,638貫940文	在詰地役人切米の内去丑夏冬・当寅春御張紙(値段)代銭渡
渡合計 米 1,795.9858石・銭1,638貫940文	
差引残 米 34,587.8045石	……………佐渡御蔵納
金 7,860両2分・銀12匁1分7厘1毛	……………佐渡御金蔵納
銭 14,469貫404文	

(註) 天保十二年「書拔帳」(「丙午雜記」、『誠齋雜記』東京大学史料編纂所蔵)により作成。

るが、寛政期までが一万四〇〇〇石、それ以後文政期までが一万石から一万七〇〇〇石、天保期以降は一万石内外であったとされる⁽⁴⁹⁾。また、江戸廻米については、寛政八年に「御試として」手船で一〇〇〇石が送られているが、⁽⁴⁹⁾その後の詳細は不明である。

天保十二年の佐渡御蔵納渡を表15に示した。佐渡国一三万二五四八石余の支配地からの収納米・金高は米三万六三八三石余・金七八六〇両余・銀一二匁余・銭一万六一〇八貫余であった。金納分は畑方年貢や小物成と考えられる。そして、ここから地役人切米扶持方・役扶持、同張紙値段での切米代銭渡、囲米などの渡方を除いて、米三万四四八七石余・金七八六〇両余・銀一二匁余・銭一万四四六九貫余が佐渡御蔵・同金蔵に納められたのである。さらに、この佐渡御蔵収納分からおよそ一万石が大坂廻

米されたほか、「金銀山金穿大工」入用米への充当や佐渡国内での米需要に応じた払米が行われたのであった。表中に「広恵倉」渡分として七五〇石があるが、これは後述する「火急之御手当」のうちの非常御備米であつたと思われる。「広恵倉」は米価調節と商品流通の掌握、貧民救済、善行褒賞などの機能を持って文政六年に設置された施設・倉庫であり、諸藩の交易会所に相当するものであつた。⁽⁴⁹²⁾

ここで佐渡における囲米・囲籾についても簡単にふれておこう。囲米は、天明四年佐渡奉行石野平蔵の時に村高一〇〇石につき米五斗・雑穀一石の割合で六カ年納めさせ、「助合穀」と称して村方に囲い置いたことにはじまる（寛政六年以降は村預かりで運営）。また、安永三年からは「村々急変夫食御手当米」の貸付制度も開始されたが、この制度は、安永三年から同七年まで五カ年間奉行所が高一石につき錢一〇文ずつ取りたて、これを貸付利倍して元錢は村方へ返却し、利錢分で買い入れた米を不作時などに貸し付けるというものであつた。⁽⁴⁹³⁾ 寛政五年に一〇〇〇石が、享和二年に八五石余が御蔵納されて合計一〇八五石二斗五升四合となつたが、文化五年に外海付村々の御備米として二〇〇石が支出され、文政十一年頃には残米八八五石余が貸付分とされた（五カ年賦貸付）。

一方、異国船来航に備える「非常為御備御蔵御囲籾」は、寛政四年から年々籾一〇〇〇石ずつ詰められるようになった（同八年より籾一五〇〇石ずつ）。十一カ年目となった享和二年以降毎年詰替が行われたが、古籾は、摺り立てのうゑ佐渡国内で地払いされたり、籾のまま他国払いされたりした。⁽⁴⁹⁴⁾ また、相川市中困窮者のために摺り立てられ、「御救米」としても払米された（この「御救米」は、御米蔵定番役二人、同並役三人、地方掛二人が担当し、御蔵番・小揚頭・平小揚のうち九人が「下掛り」として動員された）。なお、この囲籾のうち寛政十年分については、その詰替に際して籾一五〇〇石分（五合摺）の米七五〇石が納められた。そして、御蔵における翌年への繰越米一九八石余（五カ年平均）と合わせておよそ米九〇〇石余が「火急之御手当」とされたのである。また、さらに、このうちの米七五〇石については「非

常御備」の名目で別扱いとされ、以後は御蔵諸渡米のうちへ加えられて、年貢米で年々新穀に詰め替えられたのであった。

以上みてきたように、佐渡の御蔵は、佐渡国内の年貢米や他国からの買入米を収納し、それを奉行所役人の切米扶持方にあてるとともに鉱山労働者や町方商工業者のための飯米として支出・払米する役割を担っていた。佐渡金銀山をかかえる佐渡の御蔵にとって、米の安定的供給は最大の使命であったといえよう。佐渡金銀山の衰退とともに御蔵詰米の江戸廻米も一時行われたが、後にはその分が銀納されるようになった（元禄元年に銀納も中止）。享保十六年には他国払いが再び認められ、宝暦十三年からは大坂廻米も始まって、売却代金が地払い米代金とともに江戸の幕府御金蔵に納められたのである。

慶応四年一月九日、北陸道鎮撫総督に従三位高倉永祐、副総督に従五位下四条隆平が任命された。⁽⁴⁸⁾ 一方、幕府は、二月一日に越後国内の幕領はすべて会津・米沢・桑名・高田四藩の預所とする旨通達した。鳥羽伏見の戦い以後の不安定な情勢のもとで、北越地域においても幕領支配が次第に困難になってきたことを示すものといえよう。三月九日に、北陸道先鋒総督兼鎮撫使高倉永祐は佐渡奉行鈴木兵庫頭（重嶺）・新潟奉行白石下総守（千別）を高田に召還したが、両者とも自らは出頭せず支配組頭などを代理として派遣するなどした（高倉永祐は三月十五日越後高田に至る）。その後、四月十九日に新潟裁判所が、同月二十四日には佐渡裁判所が相次いで設置された。そして、新潟裁判所総督には北陸道先鋒兼鎮撫副総督の四条隆平が、また、佐渡裁判所総督には侍従滋野井公寿が就任した（佐渡裁判所判事には熊本藩士津田山三郎・広島藩士小林柔吉が任ぜられた）。佐渡奉行鈴木重嶺は、同年閏四月に江戸で高倉総督に王政復古の朝旨を奉戴する旨の請書とともに年貢や金銀・米穀有高などを記した佐渡支配関係書類を提出した。そして、同月十六日鈴木は御役御免となり、二日後の十八日には佐渡奉行所も廃止されたのである。佐渡の御蔵は、佐渡奉行および佐渡奉

行所が廃止された後も旧佐渡奉行支配組頭らによって暫くの間支配・管理されるものの、佐渡奉行所が廃止された閏四月の時点をもって幕府支配を離れたとみなすことができよう。

(五) 清水御蔵

駿河国清水にも御蔵が置かれた。最初に幕府の御蔵が置かれたのは慶長十四年のことであり、清水御殿が造営された際に御蔵が併設されている。また、清水湊は駿府城下唯一の外港であったことから、大坂の陣前後には蔵屋敷が置かれていたといわれる。⁽⁴⁹⁶⁾そして、慶長末年から寛永初年には、当時の駿府城城主であった徳川家康・頼宣・忠長らのもとに納入された年貢米も清水湊を経由するものが少なくなかった。さらに、清水湊は甲州から江戸への年貢米輸送の重要な拠点であった。したがって、清水湊にはそうした年貢米を一時保管する米蔵があったものと考えられる。徳川綱豊（甲府中納言）や柳沢吉保・吉里が甲府城主の時には清水町の対岸の向島に御蔵が置かれ、そこに陸揚げされ、清水湊でさらに大船に積みかえて江戸に廻米したのであった（柳沢吉保の時には、米蔵四棟〈四三〇坪〉、御蔵番二人が置かれた）。⁽⁴⁹⁷⁾享保九年に柳沢吉里は大和郡山に転封となるが、その後向島には、甲府・市川・石和の三代官が支配する「米置場」（甲州御廻米清水湊向島御囲所・「米揚場」）が置かれた。しかし、この「米置場」は、江戸廻米のための年貢米を一時保管するという機能しか持っていなかったのである。

ところが、享保十七年に、江戸廻米のための一時保管蔵としてではなく、別の機能をもつ御蔵が新たに清水町に建てられることになった。その契機は、同年の西国筋虫付損毛に際して貸与された諸国城詰米返納米の納入先に、大坂御蔵・二条御蔵とともに駿州清水（清水御蔵）が指定されたことであった。そして、同年五月から駿府代官山田次右衛門（邦政）差配のもと一四〇〇両余で御蔵六棟（二八戸前、総囲坪数は一六八二坪、最大収容米量三万五、六〇〇〇俵）が

信助、甲州石和代官篠本彦次郎の各支配地からの年貢米合計六四一石余が詰められたことがわかる。そして、この分は実際には粃で納入されたものと考えられる。⁽³⁰⁵⁾ 清水御蔵は、このように基本的には「新規御囲米」の貯蔵施設としての機能をもつ御蔵であつて、江戸廻米のための「米置場」(一時保管蔵)ではなかった。「米置場」については、清水湊廻船問屋から清水湊出役(代官寺西直次郎手代増田繁七郎)にあてた安政五年「甲州御廻米御積立」に関する書面に、「御米御積渡之節者、御米置場御矢来内江罷在^(出)一同立会、御米改請取」とある。⁽³⁰⁶⁾ また、文化十年の「三河岸仕法書控」には、清水湊からの「江戸御廻米船頭へ渡方の仕法」として「御米置場矢来外番ニいたし、朝夕出役(御普請役様并御支配様より御出役)・名主并問屋(廻米問屋)立会、本戸封印致置、矢来の内用向の義有之節ハ出役・名主・問屋立会封印切相改出^(勤)初可仕候」(括弧内は引用者)と記される。⁽³⁰⁷⁾ 江戸廻米のための「米置場」は、勘定所役人や代官手代などの出役関与のもとで、名主や廻米問屋が管理にあたっていたことがわかる。なお、天保二年には「非常之節出火防方駄付人足」が江尻町などに課せられている。⁽³⁰⁸⁾

清水御蔵の詰廻高の変化を正確にとらえることは難しいが、文化期および文政期前半は駿府御蔵と合わせて粃二万石が貯蔵されていた。その後、清水御蔵粃は、天保八年には飢饉時の御救米として駿府城下はもとより丸子宿・江尻宿・清水町などに賑給されるなどして(下付米三二七四俵余・拝借米一〇三七俵余)、天保十四年の時点では粃九三〇〇石余であつたことが確認できる。⁽³⁰⁹⁾ 嘉永七年の地震では六棟一八戸前全部が潰れて米・粃の過半が水濡れ被害にあつたが、御蔵は安政二年に一二六〇両二分余で建て直され、⁽³¹⁰⁾ 粃もその後詰め戻されて、文久元年には「米価高直払底之節駿府町方之者共難渋ニ付」という理由で清水御蔵粃一万俵が払米された(一両に付き二石二斗替)。⁽³¹¹⁾ また、その後の慶応二年六月にも、類焼にともなう清水町内の難渋民に粃九三石が安値で払い下げられ、⁽³¹²⁾ さらに、駿府御蔵のところで既に述べたように、同年十月には駿府・清水両御蔵から合わせて一万俵の払米が行われることになったのである。

慶応四年五月二十四日、徳川家達は駿河国府中城主として駿河一円ほかで七〇万石の領地を支配することとなった（駿河府中藩、静岡藩）。幕府目付梶清三郎の駿府探索書「駿州久能山并駿府表之形勢書」（慶応四年五月）には、「駿州清水港御囲米蔵、当時御守衛として同国八幡村八幡神主八幡主殿、同国三保明神神主太田出羽、右兩人頭取ニテ近辺之社家相集メ、御蔵警衛并入船改仕、尤当三月中右御蔵え甲州米凡五万俵も積込ニ相成候処、四月上旬筑州蒸気船壹艘入津、右御囲米之内七千俵程も積込、江府え相廻り候由」とある。⁽⁵¹³⁾清水御蔵は、駿府御蔵と同様に慶応四年二月上旬頃には幕府管理を離れていたと思われるが、同年三月頃には赤心隊（草莽隊の一つ、駿河の神主が参加）が清水御蔵を警備し、⁽⁵¹⁴⁾四月中旬頃には四万俵をこえる貯蔵米があつた可能性がある。

こうした清水御蔵米のその後については定かでない。しかし、慶応四年五月から十二月の駿河府中藩の財政帳簿・米方収入に「囲籾摺立米」として二万四九八一石八斗二升八合余が記載されている。⁽⁵¹⁵⁾これは清水御蔵の囲籾などが徳川家に引き渡され摺り立てられたものではなかつたかと考えられる。

（六）熱田・笠松御蔵

尾州熱田御蔵は、熱田御囲蔵ともよばれた。その成立は寛永十年で、将軍上洛時の需用にあてる目的で囲籾がなされた（「御詰籾」と呼称された）。⁽⁵¹⁶⁾御蔵は、熱田大神宮（本社）と堀川のほぼ中間に置かれ（文化六年の絵図では掛町、「尾張志」では蔵之前町）、御蔵の規模は長さ八間に横四間半（三六坪）であつた。⁽⁵¹⁷⁾幕府の御蔵が尾張国内に置かれていたことは尾張藩でも熱田役所関係者以外あまり知られていなかったものとみえ、「吏事随筆」にはつぎのように記される。⁽⁵¹⁸⁾

正徳五年末九月

一 熱田に公義御蔵有之、笠松辻六郎左衛門殿支配にて有之段相聞候付、右手代共に相尋候処、左様の埒曾て存候旨無之に付、熱田手代飯田新五左衛門へ内意にて申遣候処、委細致承知、以絵図指越し候、(中略)当春公義より御調の餅米も此御蔵へ辻六郎左衛門殿より入置被申候儀候

延宝四年と貞享四年の時点での詰米高は、それぞれ米一〇〇〇石、三〇〇石であつた。貞享四年については、「米千石之積り粃にて詰置候得共、近年者米三百石之積粃にて詰置、翌年詰替候時入札を以延売り」とあり、⁽⁵¹⁾ 粃六〇〇石が詰められていたことがわかる。そして、熱田御蔵は笠松代官または美濃郡代によつて支配・管理された。なお、享保十二年の場合では、熱田御蔵の修復は入札によつて行われ、笠松役所からの依頼で入札触れが名古屋町・熱田町・鳴海町に回された。⁽⁵²⁾

詰米・詰粃規定高は延享二年の時点ではなくなっているが、そのかわり「困粃」ということで濃州幕領村々の年貢米のうちから粃六〇〇石が備蓄され、粃一石につき増代米五斗八升ずつが支給された。困粃は、江戸での遣方に不足がでた場合には江戸へ送られ、御用がない場合には翌年の夏村々に引き取られて、百姓作徳米をもつて新粃に詰め替えられた。⁽⁵²⁾ 寛政二年に一旦中止されたが、同四年には「濃州急難其外非常為御手当」(「美濃国急難非常之御手当」との理由から笠松代官所および信楽代官支配村々、大垣藩預所村々に粃一三九三石五斗の詰粃が命じられた。笠松分は粃六五七石五斗、信楽分は粃八六石五斗、大垣藩預所分は粃六四九石五斗であつた(享和三年、磐城平藩が美濃国内に二万⁽⁵²⁾ 一五九〇石余の支配地を持つことになり、それにもなう割り替えて笠松分は粃六八八石に変更)。この困粃は、三、四年目ごとに百姓作徳米をもつて新粃と詰め替えられたが、その都度多くの欠減りがでて村方は大いに困惑した。そこで寛政十二年に、笠松代官辻六郎左衛門(守貞)が熱田御蔵と後述する笠松御蔵の両御蔵困粃について、年貢米での詰替と

古粃の払下げを願い出た。これに対して、幕府勘定所は、三年目の煽立と、その際の欠減り分については年貢米による詰め足しを認める一方、煽立の済んだ粃については、一〇年程は詰替の必要はないとして詰替期間の延長を命じたのであった(三年目の享和三年に煽立が行われたが、その際両御蔵の欠減り粃三〇六石余は翌年春に年貢米で補充された)。その後、文化七年には、笠松代官三河口太忠らが詰替から一〇カ年を経た熱田・笠松両御蔵困粃の取扱い方(詰替・払粃)を幕府勘定所に問い合わせたが、幕府勘定所は二〇カ年の困粃と米価高値の際の詰替を命じたにとどまった。なお、煽立・詰替に際しては、笠松代官所・大垣藩預所から役人一人ずつが立ち会い、開封・封印する定めであった。

つぎに笠松御蔵についてみてみよう。寛文二年、美濃郡代の名取半左衛門(長知)は、可児郡徳野村に置かれていた代官所(陣屋)を不便として、これを葉栗郡笠松村に移した。⁽⁵²⁾笠松御蔵は、笠松御困蔵ともよばれたが、同御蔵は翌三年に建てられたといわれている。

美濃国における預所を含む幕府領は、寛政三年時点で一十九万四二五九石余であったが、笠松御蔵には、美濃郡代あるいは笠松代官の美濃国内支配地(時期により増減あり、一八世紀半ば以降は同国内支配高はおよそ七万六〇〇〇石余⁽⁵⁴⁾一十二万五九〇〇石余)からの年貢米の一部が収納され、地役人の切米扶持方などの諸渡米にあてられた。表16は、美濃郡代柴田善之丞の美濃・伊勢両国支配地からの天保十二年における年貢米金納渡状況を示したものである。美濃郡代支配地一〇万六二〇五石余から米三万一九一石余・金九五四両余が納められたこと、金納分はわずかであり、美濃国幕領年貢は米納を基本としていたことがわかる。そして、収納米から東海道宿々定米・在方役人切米扶持米・御膳廻米・割増米・廻米・粃質米・困粃など合計三八六二石余が差し引かれて、残米はすべて江戸御蔵に廻米された。廻米率は収納米高の八七・二%であった。一方、金納分については、およそ半分が置稗払代貸付元利金や伝馬宿入用米代渡などに使われて、四二四両余が江戸御金蔵に送られている。

このように美濃国幕領の年貢米は基本的には江戸廻米されたのであったが、幕末期の元治元年に年貢米のうち一万四七七〇石の大坂廻米が命じられた。朝幕関係の緊張にともなう措置であったと思われる。しかし、翌年三月には未だ船積みされていない分については江戸廻米とするよう変更されており（六七五四石は大坂御蔵納め済み）、慶応三年十

表16 美濃郡代支配地年貢米金納渡 (天保12年)

高 106,205.85531石 美濃・伊勢国

此収納 米 30,191.1289石・金954両1分永24文4分7厘6毛

渡	方	内	訳
米 60.0000石		東海道五ヶ宿地子代米渡	
212.8050		宿々定米渡	
1.0000		井料米渡	
10.4000		御林守給米渡	
186.4200		在方役人切米扶持方渡	
3.8300		御林守扶持米	
1,753.9800		御膳御廻粃割増米渡	
396.8552		御廻米粃五厘外賃米渡	
564.9175		笠松・熱田御囲粃	
6.9387		笠松御囲粃	
443.4471		置稗御払代御貸付利金を以買入候御 囲粃	
7.5000		御伝馬宿入用米之内宿方渡之分	
25.9650		丑急水留急破御普請御用中堤方役扶 持方渡	
2.6300		無宿玉五郎外二人之牢中飯米渡	
25.4636		貯穀二拾分一御下穀	
159.9448		置居米	
42両3分永 84文2分		太餅米粃三割増米石代渡	
224両3分永 89文4分2厘3毛		置稗御払代御貸付元金	
189両1分永 33文9分2厘		置稗御払代御貸付利金	
71両2分永 85文2分		御伝馬宿入用米之内名代渡之分	
1両2分永160文5分		御伝馬宿入用米宿方渡之分	
渡合計	米 3,862.0969石・金530両永203文2分4厘3毛		
差引残	米 26,329.0320石	江戸御蔵納	
	金 424両永71文2分3厘3毛	江戸御金蔵納	

(註) 天保十二年「書拔帳」(「丙年雜記」、『誠斎雜記』東京大学史料編纂所蔵)により作成。

一月の美濃郡代引継「演説書」にも「大坂御蔵納之儀は、先前申送も無之」とある。また、慶応二年分についてはすべて江戸廻米となつてゐることなどから、大坂御蔵への廻米は臨時的なものであつたことがわかる。なお、笠松御蔵詰以外の年貢米は、村々の郷蔵から伊勢国桑名湊まで運ばれ、そこで廻船に積み替えられ廻米されたのであつた。

笠松御蔵の機能・役割の一つは、諸渡米にあてるために必要な年貢米の収納・保管であつたが、同御蔵にはさらにもう一つ重要な役割があつた。それは、御膳粳の備蓄であり、さらには「濃州急難其外非常為御手当」の廻米であつた。笠松御蔵(笠松御囲蔵)は、寛文三年、御膳粳海上輸送の際の難破や江戸大火の備えとして建てられたといわれる。御膳粳とは、將軍はじめ大奥などの飯米に用いられた粳である。御蔵の管理は美濃郡代または笠松代官が担当した。

美濃国幕領村々の年貢米のうちから例年五〇〇石の粳が廻米されたが(「御貯粳」と唱えた)、納入に際しては熱田御蔵詰粳同様の増代米が支給された。⁽⁵²⁵⁾ 廻米は、江戸での遣方不足の際には江戸に廻米され、古粳御用がない場合には三年目の夏に村々に引き渡されて、百姓作徳米のうちから新粳に詰め替えられた。なお、大垣藩預所の安永四年御勘定目録には、「御貯粳」について「村々郷蔵ニ詰置申候」とあり、また、安永末年頃の「濃州笠松御蔵御廻米詰置候事」に、「当時者笠松御蔵詰者不仕、御代官所江^(并)御預り所郷蔵江詰置申候」とあるので、⁽⁵²⁷⁾ 安永期頃には笠松御蔵には廻米されず、代官所・預所支配村々の郷蔵に廻米されたものと思われる。そして、この「御貯粳」についても、熱田御蔵詰粳と同様に寛政二年に中止されたが、同年のうちに「濃州急難其外非常為御手当」(「美濃国急難非常之御手当」)の廻米が命じられた。凶荒・救民対策としての新たな廻米が開始されることになつたのである。

寛政二年・同四年には合わせて粳一三〇六石五斗の廻米が命じられ、⁽⁵²⁸⁾ 美濃国に支配地を持つ笠松代官所、信楽代官所(文久元年以降最寄り替えにより美濃国内の支配地を失う)、大垣藩預所、飛驒高山代官所の出張加茂郡下川辺陣屋(万延元年以降笠松代官支配)の四カ所の支配所村々から割合納入された(笠松分粳五七三石八斗、信楽分粳七〇石五斗などが

年貢米のうちから囲糶された。なお、笠松分は、享和三年に糶六三〇石五斗に改められた。三年目の煽立、欠減り分の年貢米での詰め足し、開封・封印時の笠松・大垣役人の一人ずつ立会は、熱田御蔵と同様である。文化十二年の洪水による被害に際して、笠松代官松下内匠（堅徳）（文化十三年五月～文政十一年十二月までは美濃郡代）は笠松御蔵囲糶八九九石三斗を急夫食として美濃幕領被害村々に放出した。放出は幕府の事後承認をえて、しかも無償貸与となった。この分は文化十四年から五カ年賦で笠松・信楽代官所および大垣藩預所支配村々の年貢米で詰め戻された（笠松代官支配地分糶六三〇石五斗・信楽代官支配地分糶七〇石五斗・大垣藩預所分糶一九八石三斗）。

熱田・笠松の両御蔵囲糶は、文政九年の大垣藩預所一帯の洪水、天保七年の凶作時などでも使用された。両御蔵囲糶の大垣藩預所分についてみてみよう。熱田御蔵囲糶の大垣藩預所分は、寛政四年時点では六四九石五斗であり、享和元年に詰替が行われたままとなっていたが、文政六年二月の煽立によつて四八七石四斗六升に減少した。そして、同九年にはこのうちから二二六石八斗が急夫食として無償放出された。一方、笠松御蔵囲糶の大垣藩預所分は、享和三年以降はおおよそ四七〇石～四八〇石程であったと推定されるが、その後の詰替・煽立で欠減り、文政七年には四三二石八斗八升六合となっていた。そして、熱田御蔵同様同九年に、このうちから二〇一石二斗三升五合が急夫食として無償放出された（熱田・笠松両御蔵からの無償放出分合わせて四二八石三升五合は、前記四カ所支配所の村々年貢米のうちから詰め戻される予定であったが、返納されないまま慶応三年に至った）。そして、大垣藩預所の熱田御蔵囲糶四八七石四斗六升のうち、文政九年に無償放出された二二六石八斗を差し引いた残糶二六〇石六斗六升は、天保七年の凶作の際には困窮民に貸与されたが、翌八年から五カ年賦で詰め戻された（安政三年に煽立があり、糶五六石一斗六升二合が欠減つて二〇四石四斗九升八合となった）。一方、笠松御蔵囲糶のうち文政九年の無償放出分を除いた残糶二二一石六斗五升一合については、天保度に詰め替えられたが、安政五年の煽立で欠減りがでて一七五石四斗七升八合となった。慶応

表17 熱田・笠松御蔵囲糶高

(慶応3年)

	熱田御蔵	笠松御蔵	笠松新囲蔵
「濃州急難其外非常為御手当」の囲糶	石	石	
笠松陣屋支配地分有高	609.9200	404.3616	—
(同、同支配村々へ貸付未返納分)	—	(305.9904)	
大垣藩預所支配地分有高	204.4980	175.4780	—
(同、文政九年無償被下切分)	(226.8000)	(201.2350)	
小 計 ①	814.4180 (1,041.2180)	579.8403 (1,087.0657)	—
「置稗御払代御貸付」利金による囲糶			
笠松陣屋支配地分有高	260.0270	466.5000	—
小 計 ②	260.0270	466.5000	—
「郡中村々御救方」囲糶			石
笠松陣屋支配地分有高	—	—	* 68.8580
小 計 ③	—	—	68.8580
合 計 (①+②+③)	1,074.4450 (1,301.2450)	1,046.3403 (1,553.5657)	68.8580

(註) 「演説書」(『岐阜県史』史料編・近世二、583～595頁)より作成。笠松陣屋支配地分有高には旧下川辺陣屋支配地分(万延元年に笠松陣屋に所属替え)が含まれる。*印は、他に貸付金1,034両1分余、利金866両2分余(うち糶買入にあてる分として786両1分余)があった。

三年時点での熱田・笠松両御蔵における「濃州急難其外非常為御手当」の囲糶高は表17の通りである。

熱田・笠松両御蔵には、前述の「濃州急難其外非常為御手当」の囲糶以外に「置稗御払代御貸付金」の利金によって買い入れられた糶も貯蔵された。この「置稗御払代御貸付」制度は、天明六年から美濃国加茂・可児二郡村々救済のために始められたものであり、下川辺出張陣屋と笠松代官所の両役所において取り扱われた。この制度は、(一)天明六年に、まず元金二〇〇両一分永一文七分五厘七毛を年利一割で貸し付け、(二)これによって得られた利子分のうちの四両二分永二四八文二分四厘三毛は

元金に加え、残りの利子分で粃・稗を買い入れる。(三)そして、翌七年以降は二〇五両を元金として据え置き、これを年利一割で貸し付け、その利子分で粃・稗を買い入れ貯蔵する、というものであった。近世中期以降各地で公金貸付と貯蔵・夫食貸付を連結させた郷村貯穀が展開するが、これもその一つといえよう。なお、粃・稗買入にあてるとされた利子は、米価高騰などを理由に積み立てられたり、文政十二年の美濃・伊勢両国出水時夫食渡方への返済金に使用されたりしている。

「置稗御払代御貸付金」は、文政五年に仕法替となり、翌年から利子が五分に引き下げられる一方、粃・稗の買入も中止されて金子での積み立てに改められた。同年までに粃三一石余・稗一一九七石余が村々郷蔵に貯蔵されていたが、翌六年に美濃郡代松下内匠(堅徳)が「笠松・熱田御囲粃同様之品ニ付、両御蔵え詰替被仰付候ハ、第一取締も宜、且は御囲粃欠減之分、別ニ詰足不被仰付候共御差支有之間敷」として熱田・笠松両御蔵への詰替を幕府に願い出した。その結果、稗は粃に直され熱田・笠松両御蔵に囲粃されることになったが、新粃での詰替は不作などを理由に延引されて、天保五年にようやく終了した。熱田御蔵に囲粃された笠松代官支配地分は安政四年に煽立されたが、粃三三石五斗七升一合のうち七三石五斗四升四合が欠減り二六〇石二升七合となった。また、笠松御蔵に囲粃された笠松代官支配地分は安政五年に煽立が行われ、粃四七八石九斗九升七合のうち一〇八石三斗五升二合が欠減り三七〇石六斗四升五合に、下川辺出張陣屋支配地分は一二三石八斗七升七合のうち二八石二升二合が欠減り九五石八斗五升五合となった(笠松・下川辺分合計四六六石五斗)。この美濃郡代による公金貸付は、天保十四年の仕法替(半高棄捐・半高無利息年賦返済)の適用を受けるなどして制度が改変しつつも慶応期まで続いた(慶応三年時点での、「置稗御払代御貸付」による熱田・笠松両御蔵の囲粃高は前掲表⁽²⁹⁾17)。

さらに、笠松御蔵には、天保七年の凶作・飢饉を契機として同九年に新たに設置された新御囲蔵もあった。天保八

年、伊勢国桑名郡長島新田のうち加稻新田ほか二九カ村の地主が新田村々の幕領編入を条件に「(新田) 村々御救筋爲元立」一五〇〇両を上納することになった。そして、地主達は、新田村々救済を郡中村々救済に拡大したいという郡代の要望にこたえて、さらに六五〇両の追加上納にも応じたのであった(五〇両は正金上納、残金分は同九年から五カ年賦で粃上納)。新御囲蔵は、笠松御蔵の隣地に郡中取立金八五二両余のうちの四四九両余を使って建てられた(残金四〇三両余は貸付金とし、利金は御蔵修復その他の入用にあてられた)。この新御囲蔵には、上納金一五五〇両で買い入れの粃(当初計画では同九年より五カ年間の粃買入、一両につき米一石替)と五カ年賦上納粃とが納められるはずであったが、米価高騰・濃勢州一帯の洪水などで計画は変更を余儀なくされた。すなわち、買入粃は二カ年行われただけで、残金は荒地起返手当金・夫食代などの貸付金にまわされ、また、五カ年賦上納粃も二カ年分が納入されただけで、残り三カ年分に相当する三六〇両は繰り上げ正金納されることになった。この結果、嘉永二年時点での囲粃高は、天保九・十年分の年賦上納粃四八〇石、同十・十一年分の買入粃一三〇八石、葉栗郡奈良津新田村逸作が同九年から五カ年賦で上納した差出粃三〇〇石の合計二〇八八石であった。その後、嘉永三年・安政三年・同五年・万延元年・慶応元年の各洪水で合計粃一九六三石五斗を伊勢国桑名郡新田村々ほかへ無償配布し、さらに夫食渡方への返納などがあつて、慶応三年時点での囲粃高は六八石余、粃買入金七八六両余(ほかに貸付金一〇三四両一分余)となったのである。

つぎに、熱田・笠松両御蔵の御蔵番および両御蔵の修復に関する事柄についてみておこう。熱田御蔵の警備などを担当した御蔵番は二人であったが、彼らは、寛永年中に御蔵が置かれた際に召し抱えられた者の子孫であり、代々美濃郡代付足輕並で苗字帯刀が許された。慶応三年時点では三両二人扶持ずつが支給されたが、この分は笠松代官所と大垣藩預所とが囲粃高に割り合つて郡中から取り立てた。一方、笠松御蔵の御蔵番一人は、寛文年中の御蔵設置の時に召し抱えられた者の子孫であり、待遇などは熱田御蔵の場合と同じであった。その後、笠松新御囲蔵が建てられた

のにもない、笠松御蔵番一人が増員されることになって、笠松新御囲蔵に粃三〇〇石の差加えを行った美濃国葉栗郡奈良津新田村の逸作が任命された（待遇については、本人の希望により無給とされた）。

熱田御蔵・同番人小屋の修復については、大破の際は笠松代官所、信楽代官所、大垣藩預所の三者役人が立ち会い、見分目論見のうえ積帳（見積帳）をもつて幕府に伺い出ることになっていた。また、小破の際は、三者立会・見分目論見のうえ熱田御蔵詰粃・囲粃高に割り合つて徴収した郡中入用で修復するのが慣例であった。笠松御蔵の修復も基本的には同じ手続きが必要であつたと思われる。笠松御蔵は、いわゆる安政の大地震によつて大破し、安政四年に修復された。大破ではあつたが、この時には笠松代官所・下川辺出張陣屋・大垣藩預所の役人が立会・見分目論見のうえ、御蔵修復費用が三者の囲粃高に应じて郡中より徴収された。

慶応四年一月二十二日、朝廷政府より美濃・飛驒地方の鎮撫先発を命じられた竹沢寛三郎が笠松陣屋に入った。また、二月一日には東山道鎮撫総督岩倉具定が美濃大垣に至り、翌日大垣藩に笠松陣屋および同地方の支配を委ねた。⁽⁵³¹⁾旧笠松陣屋に笠松裁判所が置かれ、参与大原重徳が総督に任命されたのは同年四月十五日のことであるが、笠松御蔵⁽⁵³¹⁾の幕府御蔵としての機能は一月末あるいは二月上旬には停止したとみられる。なお、同年閏四月二十五日以降、笠松御蔵は新たに置かれた笠松県の米蔵として使用されている。

（七）高山・古川御蔵

飛驒国に置かれた御蔵は、御蔵奉行によつて管理されたわけではなく、また、詰米が行われたわけでもなかったが、一国幕領に置かれた御蔵という意味で、その管理の実態や機能・役割を考察してみることにはしたい。

元禄五年七月、高山藩主金森出雲守（頼貴）が出羽上之山に転封となつたあと飛驒一国は幕領となり、飛驒代官・郡

代が支配した。初代飛驒代官には関東代官伊奈半十郎（忠篤）が兼帯で任ぜられ、同年九月高山に着任した。そして、翌月から金森家家老金森兵庫・同江戸家老渡邊外記ら四家の屋敷跡を会所として政務を開始した。高山城の破却は同八年六月に終わるが、これに先立ち同八年四月の時点で金森家向屋敷に代官所を移し、高山陣屋と称して、以後幕末までここが飛驒国支配の中心となった。⁽³³²⁾ なお、飛驒代官・郡代の支配は、美濃国幕領の一部（享保十一年頃から万延元年まで）と越前国幕領の一部（明和三年から慶応四年一月まで）にも及んでおり、⁽³³³⁾ これら地方の支配のために、享保十四年に美濃国加茂郡下川辺村に下川辺陣屋（高山代官所の出張陣屋）が置かれ、また、越前国丹生郡本保村の本保陣屋（同）には手代五、六人が常駐した。飛驒代官・郡代の管理下にあった下川辺陣屋の支配高は、享保期には加茂郡・郡上郡・恵那郡などに八九三二石余であった。一方、本保陣屋支配高は、明和四年の時点では越前国大野郡・丹生郡・今立郡・南条郡に二万六〇〇〇石余であり、文久二年には六万四九四四石余、慶応四年には六万五〇二九石余であった。⁽³³⁴⁾ 「県令集覧」では、飛驒代官・郡代の支配地を「飛驒・加賀・越前・美濃」あるいは「飛驒・越前・越前加賀白山麓・美濃」と記す。⁽³³⁵⁾ 白山麓一六カ村（計二三〇石余）は、もとは越前国大野郡に属し福井藩預所であったが、加賀藩との帰属をめぐる争いが起こり、寛文八年八月十日に幕領に編入されて加賀国能美郡に属することになった（この時美濃笠松代官の支配地となり、その後保田代官の支配をへて飛驒代官の支配地となった）。なお、「天保郷帳」では、この一六カ村を越前国大野郡に収め、「越前加賀白山麓」として記している。⁽³³⁶⁾

元禄十二年三月の飛驒代官伊奈半左衛門（忠順）の幕府勘定所宛の「覚」に、「飛州高山城三之丸ニ有之候御詰米蔵、破却以後外へ引候て建直シ申候、三ノ丸ニ有之内は、在番之方より番人等付居申候、外へ建直候以後百姓共当分之番申付候」とあるように、⁽³³⁷⁾ 金森氏支配時代に高山城三之丸にあった御蔵（米蔵）は破却後に高山町内に移築されたのであった。これがおそらく後の高山御蔵となったものと思われるが詳細は不明である。なお、御蔵の規模についても不明で

あるが、享保期には二棟一六戸前であつたとされる。⁽⁵³⁸⁾

一方、古川御蔵は、金森家の旅館として残された増島城が高山城と同じく元禄八年に破却されたあと、増島城の御米蔵跡ちかくに建てられた。寛政九年五月「吉城郡古川町方村之内旅館明細絵図」により、御蔵は一棟で御蔵敷地は二五間半に一九間一尺(四八八坪余)であつたことがわかる。⁽⁵³⁹⁾

飛驒国には、元禄期から寛政初年までは高山町・古川町村のほか船津・萩原・下原の各町村にも御蔵が置かれ、また、そのほかに支配地内三九カ所に郷蔵があつて、年貢米はいったんこれらの御蔵・郷蔵に収納された。そして、御蔵の修復については、元禄十六年以降高山町・古川町村・船津町村・萩原町村・下原町村にある御蔵(六ヶ所)は幕府入用で修復を行い、残りの郷蔵などは百姓入用で修復することになった。⁽⁵⁴⁰⁾ なお、安永六年からは、高山・古川両御蔵払米買受人が「御蔵為御修復冥加金」三〇両を毎年上納することになり、この上納金が御蔵修復費用にあてられることになった。⁽⁵⁴²⁾ 御蔵修復のない年は、上納金は地方勘定に組み入れられ江戸御金蔵に納入された。

正徳三年三月、飛驒代官伊奈半左衛門(忠達)は幕府勘定所に「飛驒御年貢米払方之義」についての伺書を提出した。⁽⁵⁴³⁾

表18は、伺書をもとに年貢米使途の内訳を示したものである。表から、正徳二年頃は飛驒国内から四万四〇〇〇俵余(四斗入、以下同じ、米換算一万七六〇〇石余)が納入されていたことがわかる(ここには石代納分も含まれていたものと思われる)。また、使途については、量の多い順に、(ア)「高山町市売・小売米」一万三〇〇〇俵余、(イ)「飛州村々百姓延売米」六〇〇〇俵余、(ウ)「飛驒南方百姓本伐・榎木・杣飯米并谷出日用飯米」六〇〇〇俵余、(エ)「在々所蔵之分」四六〇〇俵余、(オ)「飛州諸役人御扶持切米・御普請人足扶持奉行扶持」二八〇〇俵余、(カ)「金銀山延売米」五〇〇俵余、の六項目があげられていた。(ア)は、高山町七〇〇〇人余に対するものであり、一カ月に六日の市日を

表18 飛驒国年貢米納渡

(正徳3年)

代官案	勘定所の修正	内 容 (処理方法 → 勘定所指示処理方法)
(ア) 13,000俵	10,000俵	高山町市売り・小売り米 (当座払い)
(イ) 6,000	5,000	飛驒村々百姓作食米 (延べ売り→当座払い)
(ウ) 6,000	0	南方元伐杣・日用への飯米 (延べ売り→当座払い)
(エ) 4,600	3,000	在方郷蔵収納米を百姓夫食・飯米 (当座払い)
(オ) 2,800	2,800	諸役人切米扶持方・普請人足扶持
(カ) 500	(500)	金銀山山師飯米 (延べ売り→当座払い)
(キ) 11,100	11,100	北方・南方杣飯米、運上・白木稼ぎ飯米 (入札払い)
(ク) —	(11,600)	払米 (→入札払い)
計 44,000	44,000	

(註) 「飛州諸窺御証文写」(『岐阜県史』史料編・近世二、789～792頁)より作成。1俵は4斗入。勘定所からの修正・指示では、(ウ)の南方元伐杣・日用への飯米6,000俵渡は当年は中止し、この分は入札払米とする。(カ)の金銀山山師飯米500俵については「山之様子次第、追て可被申聞候」としている。

決めて、市日ごとに「市売米」は六、七〇俵から一〇〇俵まで、「小売米」は五、六〇俵ずつ(「町内端々軽キ者共」が対象)を現金払いで売り渡すというものである。(イ)は、飛驒国百姓の「作食米」として、二月と三月に収納米を売り渡し、九月と十月に春値段の石代金あるいは米で返納させるというものである。(ウ)は、飛驒南方四八カ村百姓助成のために元禄十二年より導入された樽木六〇万丁の元伐・谷出しに携わる杣・日用への飯米にあてるためのものである。(エ)は、在方郷蔵収納の年貢米を「隣国承合時々相場」をもって毎月百姓夫食・飯米として払い下げるといふものであり、毎年山稼ぎ一万五〇〇〇人が年貢米を買い取って飯米にあてているとしている。(オ)の内訳は、諸役人切米扶持米一九〇〇俵余、諸普請奉行扶持一〇〇俵余、諸普請人足扶持八〇〇俵余となっていた。(カ)は、間歩稼ぎで生活する金銀山師たちの飯米にあてるためのものであり、二月と三月に貸し出し、九月と十月に春値段の石代金あるいは米で返納させるというものであった。なお、残米一万一一〇〇俵余があったが、これも北方・南方地域における町人請負御用木元伐杣の飯米や諸運上・白木稼ぎの飯米に売り払うとしている。

これに対し、勘定所からは、(ア)については一万俵を、(イ)については五〇〇〇俵を、(エ)については三〇〇〇俵をそれぞれ限度とする。(ウ)については、当年は山稼ぎを差し止めるので、この分は入札払米とする。(イ)・(カ)などの延売りはすべて当座払いとする。また、残余米はすべて入札払いとする、などの修正が指示されたのであった。しかし、延買いの特典を失い、入札者から高値の米を買うことになった阿多野・萩原・下原・馬瀬・小坂・古川郷の農民が江戸へ出訴し、さらに蔵元払い値段よりも入札値段の方が低く損失を招いたことなどもあって、翌四年三月には入札払いが廃止されたのであった。⁽⁵⁴⁾

飛驒国にあった御蔵の機能は、飛驒郡代飯塚常之丞(政長)の時に大きく変化することになった。その第一は、船津御蔵・萩原御蔵・下原御蔵が寛政二年に廃止され、払米や地役人の扶持方などについては、高山・古川両御蔵の蔵米をあてることになったことである。高山御蔵からは、地役人切米扶持方のほか山方村々買請米や高山町人別買請米(高山町「市売米」・「小売米」の総小前割り)・諸払方などが、また、古川御蔵からは古川町人別買請米(古川町「市売米」の総小前割り)・寺院や宿場などの最寄買請米などが支出された。⁽⁵⁵⁾第二は、高山御蔵からは郡代および手付・手代の飯米も売却されたが、飯塚郡代は毎年八〇〇石前後と定められた「臨時置米」(予備米)の中から一カ年一三〇石を月割りで購入することにしたことである。なお、この「臨時置米」は、口留番所そのほか諸出役扶持方や高山代官所詰飯米、困窮村々への貸付などにも利用された。⁽⁵⁶⁾そして、第三は、高山・古川両御蔵の御蔵番(各二人ずつ)について、高山御蔵は御蔵番(下番)を抱え入れとし(足輕次席の取扱い)、古川御蔵は従来通り農民雇いとし、いずれの場合も給金等は当該御蔵納入村々の割合負担ではなく前年年貢米金のうちから支給することに変えたことである。高山御蔵の場合、元禄十二年七月以降はそれまでの御蔵番(上番)二人(代官手代が勤める、切米二〇俵三人扶持ずつ支給、但し四斗入)に加えて新たに御蔵番(下番)四人(給金二両二分・扶持米一人半扶持ずつ支給、給金・扶持米は高山御蔵へ米納村々が高割り

負担、それまでは百姓役を雇い入れ、御蔵の警備にあたらせてきたのであった。⁽⁵⁴⁷⁾ 一方、古川御蔵の場合は、御蔵番(下番)二人は農民雇いであり、番給(一石六斗ずつ)も古川御蔵納めの村々で割り合つて出してきたのであった。⁽⁵⁴⁸⁾ それを寛政二年以降、高山御蔵番については二人に減員して抱え入れとし、給金・扶持米は三両二人扶持ずつを、古川御蔵番は従来通り農民雇いの二人として一両二分一人扶持ずつを、いずれも前年年貢米金から支給することにしたのである。⁽⁵⁴⁹⁾ 第四は、高山・古川両御蔵で囲籾が始められたことである。寛政二年一月十六日に、天明七年のいわゆる「天明騒動」に関連して地役人五五人が処罰され、地役人の定員が削減された。⁽⁵⁵⁰⁾ そして、これにともなつて生じる浮米が初年度は三〇五石余と見積もられ、二年目からも二五〇石余が予定された。そこで、この浮米分を急夫食などにあてることになつて、六カ年で籾計三〇〇〇石を囲い置くことになつたのである(詰替は村々作徳米のうちをもつて六月上旬から七月下旬に行われた)。この備蓄米は、天保十四年十一月で籾三〇一七石余が、文久元年十二月には籾三〇〇〇石が貯蔵されていた。⁽⁵⁵¹⁾

飯塚郡代は、以上の御蔵改革と合わせて、これまで各地の郷蔵へ年貢を納入してきた村々や畑方村々は皆石代納に改めるなどして年貢金納化の促進に力入れた。これは、農村段階で米を売却させることによって、年貢米収納時の検査労力や経費の削減を図ることが目的であつたと考えられる。なお、寛政二年時点での飛驒三郡の米納(三分一金納・三分二米納)・金納(石代納)村々の割合はおよそ四対六であり、のち弘化年間には一〇七カ村が三分一金納・三分二米納、二九四カ村が皆金納、一三カ村が大豆納となつていた(弘化二年時点では、高山御蔵納めを行つていたのは一二二カ村であつたが、うち八三カ村が三分一金納・三分二米納、一三カ村が大豆納、二六カ村が皆金納であつた。また、古川御蔵納めは二五カ村であり、うち二四カ村が三分一金納・三分二米納、一カ村が皆金納であつた。⁽⁵⁵²⁾)

高山・古川両御蔵は飛驒代官・郡代によつて管理されたが、年貢米の納入に際しては地役人五、六人が納方掛りとなり、手付・手代が立ち会つた(古川御蔵は、手付・手代・地役人のうち二、三人ずつが派遣された。また、高山御蔵への納入は十月最初の丑の日から始まつた⁽⁵³⁾)。一方、両御蔵からの諸渡米・払米は、地役人頭取二人が所管し、「御蔵日」と称して毎月三・八の日に所定の切手と引き換えに渡され、手付・手代のうちの一人と地役人一人とが立ち会つた⁽⁵⁴⁾。高山・古川両御蔵には御蔵番二人ずつがいたが、彼らが御蔵の警備(昼夜御蔵見回り、夜中は半時毎に見回り)を担当したことは前述した通りである。なお、古川御蔵へ納入された年貢米から古川町人への払米(「市売米」・「小売米」あるいは人別買請米、寺院・宿場買請米など)や山村民へ払米(延売り)などを支出した残米は、「登米」「為登米」と称して春・夏に村入用をもつて高山御蔵に送られた⁽⁵⁵⁾。

先に正徳三年段階での高山・古川御蔵を中心とした飛驒国年貢米収納・諸渡りの様子をみたが、ここでは嘉永六年の年貢収支状況から高山・古川御蔵の役割・機能をみてみよう⁽⁵⁶⁾。飛驒国五万六六二九石余からの同年の年貢収納量は本年貢二万四〇六六石余(米納分九三五四石余、金納分一万四七二二石余)、その他口米・水車運上・六尺給米・伝馬宿入用など米納分八七四石余、小物成・各種冥加永・各種運上など金納分五三一兩余、口役銀一三八二兩余などとなつていた。しかし、口米などの米納分八七四石余は実際には金納され、さらに年貢米納分のうち四五三二石も「村々米納内」諸渡方金納可成分」とされ事実上金納化されていた。これは、高山・古川両町の「市売米」・「小売米」(寛政二年以降惣小前割の人別米)などとして市中に払い下げられた分の代金と考えられる。そして、名実ともに米納された分は四八二二石であつた。つまり、米納分は年貢収納高の二割に過ぎなかつたのである。そして、米納された分は、益田郡四八カ村への安石代での払米(山方買請米、明和九年より実施)三四〇〇石、臨時置米(無宿入牢中飯米・高山陣屋詰飯米・宿々急難手当・その他臨時諸渡り)八〇四石余、地役人其外御給扶持米六一七石余にあてられて使用されたのであつ

た。なお、同年の江戸御金蔵への納入高は一万六七九五両余であつた。

また、文久二年の「飛驒国御物成米粍永納払大積明細帳」によれば、⁽⁵⁷⁾飛驒国五万六六七三石余からの収納量は、本年貢（米納分・金納分合わせて）二万四一六〇石余を含み合計米二万六四五五石余・粍三〇三六石余・永五九〇四貫余であつた。そして、年貢納入分の八割が金納化されて米五四一九石余・粍三〇三六石余・永二万一七貫余が収納された。一方、渡方では、山方買請米三四〇〇石・置米一三九〇石余・地役人其外御給扶持米渡六一二石余・囲粍三〇〇石など、合計米五四一九石余・粍三〇三六石余・永一四五三貫余であり、差引永一万八五六四貫余であつた。

以上のように、高山・古川御蔵は年貢米の収納と収納年貢米の諸渡方の機能を果たしていたが、諸渡方においては払米がきわめて大きな比重を占めていたことが特色といえる。正徳期においても、高山・古川両御蔵をはじめ各地郷蔵の収納年貢米は、諸役人への扶持米・普請人足扶持に支給された分を除き、残りはすべて高山・古川町民や榑木伐出し・金銀山間歩稼ぎなどを含む在地農民への払米（現金売りあるいは延売り）にあてられていたのであつた。水田が極端に少なく、ほとんどが山地と畑という飛驒国の地理的特性がもたらした結果といえよう。さらに、寛政期の郡代飯塚常之丞（政長）の施策によつて、年貢米の収納は高山・古川両御蔵に限定され、それとともに払米の機能も両御蔵に委ねられることになったのである。一定量の年貢米を確保するとともに、年貢米収納時の労力・経費を節減することが目的であつたと考えられる。なお、その結果として年貢の金納化が一段と進むことになった（享保期の安石代納採用によつても増加した）。この金納年貢や払米代金は四月までに取り立てられ、飛驒国三郡中の名主・組頭から選ばれた二人の宰領に付き添われて江戸に運ばれ御金蔵に納入された（道中入用等は郡中割⁽⁵⁸⁾）。

飛驒代官・郡代の支配地が美濃国の一部および越前国の一部に及んでいたことはすでに述べたが、これらの地方からの年貢米金の納渡の実態についてはよくわからない。しかし、飛驒郡代増田作右衛門（頼興）の「安政六未元年元当分

御預所勤方書付」(越前・美濃国一万三〇三五石余)によると、同預所では本年貢高三二九六石余の八七・三%、諸運上・小物成高五五五石余の五六・一%が米納であり(諸運上・小物成は、ほかに金納分九九両余がある)、江戸廻米の際の濡米一七二石余・失墜米二二八石余・品々渡方(廻米五里外賃米など)七〇石その他を差し引いて、残米二七〇一石余を江戸御蔵(一五〇九石余)・大坂御蔵(二〇七一石余)・小菅納屋(一二〇石分の粳二四〇石)にそれぞれ納め、金納分についても差引合計一一二五両余を江戸御金蔵に納入したのであった。また、同じく「安政六未年元別廉当分御預所勤方書付」(美濃国三三八二石余)によれば、本年貢については一〇六〇石余のすべて、諸運上・小物成については三四石余の九四・二%が米納であり(諸運上・小物成は、ほかに金納分七〇両余、大豆四石余・稗五二石余の金納分一九両余がある)、品々渡方(廻米五里外賃米など)三〇石を差し引いて、残米一〇六二石余を江戸御蔵に納入し、金納分についても差引合計九〇両余を江戸御金蔵に納入したのであった。このように美濃国支配地については、基本的には米納(買替上納を含む)であったと考えられる。そして、飛驒代官・郡代の美濃・越前両国支配地からの年貢米は江戸や大坂に廻米されたのであった。この点については、天保十二年の「書拔帳」により、飛驒郡代豊田藤之進(友直)支配地からの年貢米が江戸御蔵および大坂御蔵に納められていたことから確認できる。⁽⁵⁰⁾

慶応四年一月二十八日、郡上藩士市川鼎に率いられた藩兵三〇〇人が高山町に入ったが、これに先立つ二十五日には、大原口から郡上藩兵入国との報をうけて、飛驒郡代新見内膳(正功)は手代元締浅井豊助と共に二十五日深夜代官所を放棄したのであった。⁽⁵¹⁾また、東山道鎮撫総督岩倉具定は、二月二日に郡上藩に対して飛驒地方の取締りを命じたのであった(前日に尾張藩に命じたが、これを取り消し郡上藩に変更)。さらに、美濃・飛驒地方の鎮撫先発を命じられていた竹沢寛三郎も二月四日高山代官所に入り、同月六日に郡代手代から諸帳簿類の引き渡しを受け、翌七日には代官

所門前に「天朝御用所」の高札を建てている。⁽⁵⁶⁾従って、この時点で高山御蔵は完全に幕府管理を離れたのであった。なお、高山・古川両御蔵は、のちに高山県（慶応四年五月二十三日飛騨県として成立、六月二日に改称）の米蔵としても使用された。

おわりに

重要拠点に置かれ、御蔵奉行が任命されたり詰米などが行われた幕府御蔵を中心に、その支配・管理の実態や機能・役割などを明らかにしてきた。個々の御蔵についてのまとめはそれぞれの箇所ですべてきたので省略し、ここでは御蔵全体に関わる事項についてのまとめやデータ提示を行って結びにかえることにしたい。

幕府管理の御蔵のうち主要なものは元和・寛永期には創建され、御蔵奉行以下の役職の整備がすすんで、寛永期にはいわゆる幕府「直轄蔵体制」の成立をみる。そして、それは勘定頭のもと勘定所機構が成立・整備される過程でもあり、また、幕府の財政が成立する過程でもあった。⁽⁵⁶⁾その後、貞享・元禄期から正徳・享保初年にかけての時期に御蔵の統廃合が進み、同じ頃から御蔵奉行などに役方からの就任者が増加するようになった。寛永期に設置された街道筋の御殿御蔵は享保期までには一部を除いて姿を消した。

幕府管理の御蔵においては、軍事兵糧米としての性格をもつ詰米（直轄諸城では城詰米）や凶荒・救民対策としての困米・困粃が行われるのが一般的であった。「城詰米制」は寛永十年に成立したとされるが、直轄諸城における城詰米は延享・寛政期に粃詰に変更され、大規模な不作・飢饉時には年貢米収納不足にもなつての幕府財源の補填、宿場

を含む直轄都市の窮民救済などに利用されたのであった。また、享保期以降行われるようになった囲米・囲粃は、払米や貸与を通じて米価調節機能を果たすとともに、窮民救済のために使用された。そして、これらの詰米や囲米・囲粃などを含む御蔵収納米は、諸役人への役料・切米扶持方をはじめ在番の番士・加番大名へ合力米、賃米・飯米、払米、手当米、被下米などの諸渡りにも使用された。こうした御蔵の機能・役割は各御蔵にほぼ共通したものであったが、しかし、御蔵によっては特色もみられた。例えば、江戸浅草御蔵は幕臣団への俸禄支給を目的とした日本最大の収容量を誇る御蔵であり、駿河国清水御蔵は、享保飢饉で使用された城詰米の返納米収納御蔵として機能した(大坂難波御蔵も同様の理由で創設された)。また、武蔵国小菅納屋は、江戸浅草・本所御蔵の補助御蔵としての役割を果たしたのであった。さらに、高山・古川両御蔵では、渡方において払米が大きな比重を占めるという特色があり、長崎御蔵は、長崎町奉行所・長崎会所等の諸役所入用米の供給と町年寄・地下諸役人への助成・救済を目的とした「北瀬崎入用米」の渡りに特色があった。

幕府管理の主要御蔵に収納された米の産出地を表19に示した。この表は、「金銀米納方御定」より作成したものであるが、寛政・享和期の状況を示している。廻米・詰米先御蔵は時期によって若干の変更があったが、一九世紀以降は、基本的には表に示した状況が継続したと考えられる。例えば天保十三年・同十四年、弘化四年・嘉永元年の大坂御蔵納入米についてみると、表19において廻米・詰米先御蔵に大坂御蔵が挙げられている国々幕領から行われていたことが確認できる。⁽⁵⁶⁾表から、江戸廻米は、西国および関東、奥羽、海道筋諸国幕領を中心に畿内・中国筋諸国あわせて三四カ国の幕領から行われていたことがわかる。これは当時幕領が存在した国々の七五%に相当している。なお、西国筋幕領年貢米は、上方・中国筋が不作で大坂御蔵納割賦不足時は大坂御蔵にも廻米された。また、伊豫別子銅山へは伊豫国幕領のほか美作・備中・讃岐国幕領からも米が送られていたのであった。こうした物成米の廻米先を割賦指定

表19 国別廻米・詰米先御蔵一覧

(寛政・享和期)

廻米・詰米先	国名	廻米・詰米先	国名
江戸	豊後・豊前・筑前 肥前・伊勢・美濃 三河・遠江・伊豆 相模・武蔵・上総 下総・上野・下野 安房・常陸・陸奥	二条	山城・丹波
		大津	近江
		長崎	肥後・肥前・豊後
		佐渡	佐渡
江戸・大坂	丹後・播磨・美作 備中・備後・讃岐 石見・越前・越後 能登・出羽・(豊後) (豊前)・(筑前)・ (肥前)	今市	(下野)
		浦賀	(相模)
		熱田・笠松	(美濃)
江戸・大坂・二条	河内・摂津・和泉	別子銅山	伊豫 (美作・備中・讃岐)
大坂	(佐渡)・(山城)		
江戸・駿府・清水	駿河	(高山・古川)	(飛驒)
江戸・甲府・清水	甲斐	皆金・皆銀納	大和・但馬・日向 隠岐・信濃・(陸奥)

(註) 「金銀米納方御定」(京都大学文学部図書館蔵「長坂氏記録」)により作成。(1)豊後・豊前・筑前・肥前国は、上方・中国筋不作にて大坂御蔵納割賦不足の際は、大坂廻米。(2)佐渡国は、宝暦13年より大坂廻米・大坂払米。(3)山城国は伏見葭島新田分のみが大坂御蔵納。(4)陸奥国会津領は皆金納。(5)美濃国御膳料貯糶は熱田・笠松御蔵詰。(6)美作・備中・讃岐米の内からも別子銅山買請米がある。(7)筑後国にも文化3年以降に幕領が置かれるが、筑前国などと同様の扱いであったと考えられる(江戸廻米が基本で、必要に応じて大坂廻米)。(8)飛驒国は津出が困難との理由で、年貢米は國中買請とされた。(9)能登国は、天保12年の場合は皆金納(天保十二年「書拔帳」(「丙午雜記」、『誠齋雜記』)東京大学史料編纂所蔵)。

表20 幕府御蔵納高

(天保12年)

	米	比 率 (%)		大 豆
江戸御蔵納	426,384.86769石	(76.8)	(69.3)	111.663石
大坂御蔵納	25,963.57890	(4.7)	(4.2)	1,500.000
二条御蔵納	40,558.80930	(7.3)	(6.6)	430.000
大津御蔵納	7,584.64824	(1.4)	(1.2)	
駿府御蔵納	10,415.41250	(1.9)	(1.7)	
清水御蔵納	641.64050	(0.1)	(0.1)	
甲府御蔵納	8,734.89070	(1.6)	(1.4)	
佐渡御蔵納	34,587.80405	(6.2)	(5.6)	
(小 計)	554,871.65233	(100.0)	(90.1)	2,041.663
小菅納屋納	16,464.25000	(一)	(2.7)	
今市御蔵納	5,500.00000	(一)	(0.9)	
浦賀御蔵納	1,779.88206	(一)	(0.3)	
熱田・笠松御蔵納	1,058.58560	(一)	(0.2)	
別子銅山	8,300.00000	(一)	(1.3)	
長崎御蔵納	27,581.34900	(一)	(4.5)	
(小 計)	60,684.06666	(一)	(9.9)	—
(合 計)	615,555.71899	(一)	(100.0)	2,041.663

(註) 天保十二年「書拔帳」(「丙午雜記」、『誠斎雜記』東京大学史料編纂所蔵)により作成。
江戸御蔵納には、この他菜種214.03石、漆118貫余、材木1,372本(材木蔵納)があり、大坂御蔵納には塩32.4石があった。また、越後幕領からは山蠟実109石余・里蠟実4升余・里蠟穂2,047貫余が小千谷點所に納められた。表上段の8つの御蔵納について、原史料では総計554,871.65203石とあるが、これは永井飛驒守預所渡高合計に一部誤りがあるためである。

したのは幕府勘定所取箇方の廻米方であり、不足米が生じた時には必要に応じて割賦追加や買米を指示したのであった。

各地御蔵への幕領年貢米廻米量を天保十二年の場合でみたのが表20である。この表は、天保十二年「書拔帳」から作成したが、⁽⁵⁸⁾小菅納屋納、今市、浦賀、熱田・笠松、長崎の各御蔵、別子銅山分などについては、代官所段階での「諸渡方」の中に含めて記載されており、収納分から諸渡方を差引して残余を御蔵へ廻米・

納入するという形式になっていない。例えば、今市御蔵納分は、当時今市御蔵を支配・管理していた代官森親之助への渡りという形になっており、代官所における「諸渡方」の中の一項目としてあげられている。同様に、小菅納屋納分については、代官伊奈友之助への渡りとして記載される。また、別子銅山分については、「別子立川銅山師買請米」・「豫州銅山師渡米」などと記され、合計八三〇〇石が銅山請負人へ渡されて、代金が上納されたのであった。⁽⁵⁶⁾したがって、これらの御蔵納米は代官所レベルでの納払勘定目録には記載されるが、勘定所作成の幕府財政帳簿である「金銀米大豆納払御勘定帳」には計上されなかったのである。勘定所作成の幕府財政帳簿の米方歳入に「物成」として記載されたのは、江戸・大坂・二条・大津・駿府・甲府・佐渡の七つの御蔵分であった。しかし、ここでは実際の廻米・詰米状況がより明確になる利点もあるため、七つの御蔵以外の分についても示した。表20から、江戸御蔵納は御蔵納全体の約七割を占めていたことが判明する。一方、大坂御蔵納は二万五九六三石余で四・二%にすぎない。ここから幕領米が江戸御蔵に集中されている実態をみてとることができる。なお、「御年貢米其外諸向納渡書付」によると、文化九年～文政四年までの一〇年間の平均納米が五六万六〇三三石余、文政五年～天保二年までの平均納米が五二万一九六石余、天保三年～同七年までの五年間の平均納米が五七万七五九石余であったから、⁽⁵⁶⁾天保十二年の納米量五万四八〇〇石余が例年と比較して著しく増減していたということはない。また、大坂御蔵米については、既にみてきたように大坂御蔵で必要とする遣方米は年間四万～六万石と見積もられるのであって、ここに示された大坂御蔵納米量では不足する。不足分は毎年佐渡御蔵納後に行われる一万石程の大坂廻米や諸国米の買納、さらには割賦追加などによって賄われたものと思われる。また、表中に小菅納屋納として一万六四六四石余があるが、これは実際には粃納されていたのであった。なお、既述したように、表20における大坂御蔵以下の各御蔵には、諸役人へ支給する役料や切米扶持方をはじめとする諸渡米のための必要最小限の米が廻米されたのであって、それ以外は基本的に江戸に廻米

する体制がとられていたのであった。畿内幕領からの江戸廻米は寛永期には開始されており(寛永十一年から)、足下に日本最大の米市場をもつ大坂御蔵とて例外ではなかったのである。

江戸幕府が支配・管理した御蔵は、慶応四年正月以降西国から東国に向かって順次幕府御蔵としての機能を停止していった。そして、維新政府のもと、廃止されるものがある一方で、多くの御蔵は府県の御蔵として新たな役割を担っていった(駿府御蔵は、駿河府中藩・静岡藩の御蔵となった)。こうした維新时期における府県御蔵の管理・運営の実態、および各御蔵における年貢米の出納手続きなどに関する検討も必要と思われるが、今後の課題としたい。

註

- (368) 前掲『静岡県史』通史編3・近世一、一六八・一六九頁。前掲『新訂増補国史大系・徳川実記』第二篇、六九五頁(寛永十二年十二月二日の条)。「同」第三篇、一〇五頁(寛永十五年六月九日の条)。「静岡市史」近世(一九七九年)、八七・一〇八頁。

- (369) 前掲『静岡県史』通史編3・近世一、一七〇～一七五頁。前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』一〇一～一〇四頁。

- (370) 前掲『静岡県史』通史編3・近世一、一九九・二〇〇頁。

- (371) 前掲『静岡県史』通史編3・近世一、五六五～五七一頁。「同」通史編4・近世二(一九九七年)、四四頁。

- (372) 前掲『徳川禁令考』前集第四、二〇二四号(七〇・七一頁)。「令條秘録一」の「駿府下知状」(前掲『日本財政経済史料』第五卷上、一六二頁)。

- (373) 『山梨県史』資料編8・近世1・領主(一九九八年)、七一二号(八八三頁)。

- (374) 『癸卯雜記下』(前掲『日本財政経済史料』第八卷下、五八九頁)。

- (375) 『丁未雜記』(前掲『日本財政経済史料』第四卷上、五四四頁)。

- (376) 前掲『県令集覧』の駿府紺屋町陣屋代官の項。「清水市史資料」近世一(吉川弘文館、一九六六年)、六二四頁。

- (377) 前掲『静岡県史』通史編3・近世一、五一六頁。
- (378) 『磐田市史』史料編4（一九九五年）、三五頁。佐藤孝之「近世前期における代官の年貢勘定」（『静岡県史研究』第11号、一九九五年）。天保十二年「書拔帳」（『丙午雜綴』、前掲『日本財政經濟史料』第十卷上、三六七〜三七〇頁）。『駿府御詰米御用留』（江川文庫蔵）。
- (379) 『甲府市史』史料編・第五卷・近世IV（一九八九年）、七三二〜七三五頁。史料中の「三分様」とは、甲府・石和・市川の三代官をさす。天保十二年には、甲府・石和兩代官所の年貢米は、江戸・甲府・駿府・清水の各御蔵に廻米されておき、市川代官所年貢米は、江戸・甲府・駿府の各御蔵に廻米されていた（天保十二年「書拔帳」（『丙午雜綴』、前掲『日本財政經濟史料』第十卷上、三三〇〜三三三、三五九〜三六一、三七〇〜三七二頁）。
- (380) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、七六七頁。
- (381) 駿府在番・加番制は宝永期に一時的に変更された。宝永二年九月に三加番制が二加番制となり、大名役の一加番が廃止されて旗本役の二・三加番のみとなった。また、翌三年十一月書院番の駿府在番が廃止された。しかし、翌四年二月には大名役の一加番が復活し、同六年二月には書院番の駿府在番も復活した（九月より実施）（前掲『静岡県史』通史編4・近世二、四四・四五頁）。
- (382) 前掲『雜留』二五。「戊申雜記上」（前掲『日本財政經濟史料』第二卷上、四四三頁）。
- (383) 「甲辰雜記」（前掲『日本財政經濟史料』第二卷上、四四八頁）。
- (384) 前掲『静岡県史』通史編4・近世二、四六頁。
- (385) 前掲『御勝手帳』第二十六冊（『内閣文庫所蔵史籍叢刊』54、五五頁）。
- (386) 延宝四年「所々御城米」（姫路市立図書館蔵『酒井家文書』・貞享四年（年号不知）「所々御城米并城付御米高」（前掲『憲教類典』五之九（五四頁））。
- (387) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、五〇二号（二二二〜二二四頁）。
- (388) 前掲『徳川禁令考』前集第四、二〇二四号（七〇・七一頁）。
- (389) 前掲『御勝手方御定書并伺之上被仰渡候書付』第五冊（六四九・六五〇頁）。前掲『徳川禁令考』前集第四、二〇三〇号（七五・七六頁）。前掲『吹塵録』上、二二五・二二六頁。「甲辰雜記一」（前掲『日本財政經濟史料』第一卷上、四六九・四七〇頁）。

- (390) 「癸卯雜記下」(前掲『日本財政經濟史料』第八卷下、五八九頁)。
- (391) 前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」。『宝曆元年「諸国御詰米」(前掲「憲教類典」五之九(二八頁)、史料には天明三年とあるが内容は宝曆元年)。「令條秘録一」(前掲『日本財政經濟史料』第五卷上、一六二頁)。
- (392) 前掲『雜留』二五。
- (393) 前掲『吹塵錄』上、二二三頁。
- (394) 前掲柳谷慶子「江戸幕府城詰米制の機能」。
- (395) 前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」。
- (396) 前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」。
- (397) 前掲『静岡県史』通史編4・近世二、八〇四・八〇五頁。
- (398) 天保十四年「御囲籾大豆有高」(前掲『吹塵錄』上、二二三頁)。
- (399) 前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」。
- (400) 前掲「御勝手帳」第二十六冊(五三〜五七頁)。
- (401) 前掲『新訂増補国史大系・統徳川実記』第五篇、一〇五頁。
- (402) 前掲『維新史料綱要』卷八、一九〇・二一二頁。
- (403) 『静岡県史』資料編16・近現代一(一九八九年)、一四〜一七頁。
- (404) 明治元戊辰年五月と十二月迄「静岡并東京米金納払御勘定帳」(徳川林政史研究所保管、『徳川宗家文書』)。なお、同帳簿については、前掲拙稿「静岡藩の成立と財政」で分析を加えている。
- (405) 前掲『静岡県史』通史編4・近世二、一四〇〇頁。
- (406) 前掲『復古記』第七冊、一一七・一一八頁。
- (407) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、一〇〇〇、一一七一頁。
- (408) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、七五五頁。
- (409) 『山梨県史』資料編9・近世2・甲府町方(一九九六年)、一一五〇・一一五一頁。
- (410) 前掲『山梨県史』資料編9・近世2・甲府町方、卷末付図。『同』資料編8・近世1・領主、一二七三頁。

(412) 前掲『山梨県史』資料編9・近世2・甲府町方、一二八七・一三三一頁。

(413) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、一〇〇一頁。

(414) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、一三六〇～一三七九頁。前掲『甲府市史』通史編第二卷・近世、第一章、第三・四節。徳川忠長の支配開始時期については、元和二年説と同四年説とがあるが、ここでは指摘するにとどめ、仮に元和二年としておく。なお、城番時代の正保元年には甲府御蔵へ年貢米が納入されていたことが確認できる(前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、二一四～二三三頁)。

(415) 甲府勤番支配の配下の同心については、前掲『増補新訂国史大系・徳川実記』第八篇(三四五頁)、享保九年八月十三日の条に「小普請の士に、甲斐国府中城の番を命ぜらるるもの二百人、医員四人、其下与力二十人、同心五十人をも命ぜらる」とあることから、同心は五〇人と記すものがあるが(前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、解説、一三七二頁)、同年九月十九日には「甲府勤番同心百人御留守居組・御先手組と被仰付之間、其頭々ニ而被仰渡」とあって、実際に一〇〇人の姓名も判明する(『同』資料編8・近世1・領主、九八五～九八八頁)。したがって、同心は一〇〇人としてよいであろう。

(416) 駿府勤番支配については、文久二年七月九日に一人役となったが、その後文久三年十二月二十二日に二人役となった。その後慶応元年五月十五日再び一人役となり、同年五月二十六日に再々度二人役となった。また、慶応二年二月十日以降は三回めの一人役となった。文久二年七月からの一人役については、前掲『増補新訂国史大系・統徳川実記』第四篇、三四四頁、および前掲『山梨県史』資料編9・近世2・甲府町方、一二一六頁参照。文久三年十二月以降の変化については、前掲『大日本近世史料・柳営補任五』一〇六～一〇九頁、および前掲『山梨県史』資料編9・近世2・甲府町方、一二六八・一二七〇頁参照のこと。なお、佐藤駿河守(信崇)は、慶応元年五月二十六日から同四年三月十七日まで同職にあったので(前掲『増補新訂国史大系・統徳川実記』第五篇、四〇九・四一〇頁)、最後の甲府勤番支配(慶応三年六月、甲府小普請組支配と改称)ということになる。

(417) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、一三七八頁では、「慶応二年(一八六六)八月に甲府勤番支配を廃止して甲府城代を置いて松平右京亮を任命した」とする。また、『甲府市史』通史編・第二卷・近世(一九九二年)、二六二・二六三頁でも、同様に慶応二年八月に甲府勤番支配が廃止された(廃止されたが、甲府勤番支配体制はその後も継続した)と記述される。確かに、慶応二年八月に甲府城代が任命されているが、この時に甲府勤番支配が廃止さ

れたかどうかについてははっきりしない。それは、①廃止に関する通達などの史料が不明確なこと、②前掲『新訂国史大系・統徳川実記』第五篇所収（二〇四頁）の慶応三年六月十日の条に、「甲府勤番支配之儀、以来甲府小普請組支配興唱替被仰出、一人役ニ被仰付候」とあって、同日以降甲府勤番支配が甲府小普請組支配と改称されていること、③一旦廃止され、その後に改称されたのであれば改称に際して何らかの言及があると思われるが、それが見当たらないこと、などによっている。なお、改称と同時に支配の変更もあり、以後は甲府城代支配に甲府勤番組頭・同勤番・与力一六騎・同心八〇人・御小人二〇人・破損手代二人が付属し、甲府小普請組支配に甲府小普請・同勝手小普請・御目見以上以下共・同医師が付属することになった（②と同じ内容の史料は、前掲『山梨県史』資料編9・近世2・甲府町方、一三〇〇頁にも収載されている）。

(418) 前掲『雜留』二五。前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録（一）」。「戊申雜綴上」（前掲『日本財政經濟史料』第一卷上、四八四・四八五頁）。勤番士への蔵米の渡方は、およそ一万八〇〇〇石のうち八七〇〇石が金渡りで、残り九三〇〇石が蔵米渡りであったという（前掲『甲府市史』通史編・第二卷・近世、二二五頁）。

(419) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、七五三・七五四・八七一・八七二頁。

(420) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、七五五頁。前掲『徳川禁令考』前集第四、二〇四三号（八一・八二頁）。

(421) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、七五六・七五七頁。なお、代官帰府の際は御蔵手代が代官に代わって相封印した。この史料は、甲府代官奥野忠兵衛からの享保九年十月の幕府勘定所宛の伺書であるが、「御蔵封印之儀、伺之通可被相心得候、尤立合之義有馬出羽守江申達置候条可被申合候」とあるから、本文の通り取り扱われたことがわかる。また、御蔵の小揚人足は入札によって確保されていた。なお、勤番士二人による御蔵立会は、文久二年十月より廃止され、三季切米や月々扶持方は、以後仮目付（追手・山手両支配の時には、各五人ずつ計一〇人の勤番士が任ぜられた）の立会によることになった（前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、一一四八頁。『同』資料編9・近世2・甲府町方、一三七四頁）。

(422) 「癸卯雜記下」（前掲『日本財政經濟史料』第八卷下、五八九頁）。

(423) 前掲『県令集覽』。「丁未雜記」（前掲『日本財政經濟史料』第四卷上、五四五・五四六頁）。

(424) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、七六七頁。

(425) 『甲斐国志』卷之百（人物部第九）。『甲斐国志』下（甲陽国書刊行会、一九一二年）九〇一頁。

(426) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、七五五頁。前掲『徳川禁令考』前集第四、二〇四二号(八一頁)。なお、前掲「御勝手方御定書并伺之上被仰渡候書付」第五冊(六四九頁)には、享保十九年より始まるとあるが、享保九年からの誤り。

(427) 宝暦元年「諸国御詰米」(天明三年とあるが内容は宝暦元年)は、前掲「憲教類典」五之九(二八頁)。「甲府御蔵詰米之事」は、前掲『雜留』二五。

(428) 前掲「森山孝盛日記」(天明四年二月二十三日の条)(前掲『日本都市生活史料集成』二、三都篇II所収、一一二頁)。

(429) 前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」。なお、これは「甲府御囲米」ではない。

(430) 前掲『甲府市史』史料編・第二卷・近世I、三八三頁。

(431) 前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、八五三・八五四頁。

(432) 前掲『徳川禁令考』前集第四、二〇四四号(八二頁)。前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、一四七五頁(参考資料「甲斐国関係代官変遷一覽」。前掲『大日本近世史料・柳宮補任六』、二九・三〇頁。なお、甲府町奉行若菜三男三郎の甲府着任は、任命から一年以上経った慶応三年八月二十六日のことであった(前掲『山梨県史』資料編9・近世2・甲府町方、一三〇四頁)。

(433) 前掲『維新史料綱要』卷八、二五一・二五二・二六一・二九五・三〇二頁。

(434) 前掲『維新史料綱要』卷九(一九八四年)、一八二頁。

(435) 中村質「近世長崎貿易史の研究」(吉川弘文館、一九八八年)二〇八頁。『長崎県史』対外交渉編(一九八六年)、三五〇頁。

(436) 「御米蔵」(『金井八郎翁備考録』第六・下、長崎県立図書館所蔵)。なお、以下長崎御蔵に関する記述で、とくに注記のないものは「御米蔵」によっている。

(437) 前掲「蠹餘一得」三集・卷七(四七六頁)。

(438) 「長崎実録一」(前掲『日本財政経済史料』第一卷上、二二一・二二二頁)。前掲「蠹餘一得」三集・卷七(四七九・四八〇頁)。

(439) 前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」。「癸卯雜記下」(前掲『日本財政経済史料』第八卷下、六〇六頁)。

(440) 前掲「御米蔵」。「長崎実録一」(前掲『日本財政経済史料』第一卷上、二五五・二五六頁)。なお、前掲『長崎県史』対外交渉編(四三〇頁)には五棟とある。新地御蔵については、寛政七・八年に建替・修復(一棟増築)願いが提出されていることなどから、その後増築されたことが考えられる。

(441) 「戊申雜綴上」(前掲『日本財政経済史料』第一卷上、三八五・三八六頁)。長崎廻米については、中野等「幕府年貢米の長崎廻送をめぐる諸問題」(丸山雍正編『幕藩制下の政治と社会』所収、文献出版、一九八三年)がある。

(442) 前掲「雜留」二五。「戊申雜綴上」(前掲『日本財政経済史料』第一卷上、三八五・三八六頁)。

(443) 「長崎実録一」(前掲『日本財政経済史料』第一卷上、二二一・二二二頁)。なお、肥前国彼杵郡・高来郡、肥後国天草郡からの長崎廻米は、享保五年以降宝暦・明和期までは島原藩預所の年貢米であったが、明和五年に預所返還となり、前者は長崎代官高木作右衛門、後者は日田郡代揖斐十太夫(政俊)にそれぞれ跡支配が任された(前者は、安永四年まで長崎代官当分預所、以後代官所支配地に割入れ。後者は、日田郡代当分預所となり、天明三年に再び島原藩預所となった。その後、文化九年十二月に預所返還となり、代官高木作右衛門支配地となった)、『長崎代官手代控』金井八郎翁備考録第一卷、長崎文献社、一九八〇年、一四三・一四四頁、および『藩史大事典』第7巻・九州編、雄山閣、一九八八年、二一九・二二五頁。松田唯雄『天草近代年譜』(みくに社、一九四七年)、三一三・三一四頁。

(444) 石見米二五〇〇石は、文化四年三月に豊後米(日田郡・玖珠郡)にかわったが、羽倉権九郎当分預所年貢米のうち七〇二石余はすでに江戸へ廻米済みであった。そこで、この七〇二石余の分は、文化四年の年貢米をもって納めることになった(豊後米二万六五〇〇石のほかは廻米)。また、残りの一七九七石余の分は、「時節後れ差支候三付」ということで、筑前米・筑後米で買替上納された。

(445) 高木作右衛門(忠任)支配地筑前国怡土郡の年貢米は、文化十四年までは江戸廻米されていたが、文政元年に一一八八石四斗四升六合の分が宗対馬守手当地渡しとなったため、翌年から残りの六二二石七斗一升四合の分が長崎廻米となった。

(446) 享和元年から始まった代官高木作右衛門(忠任)支配地肥前国松浦郡からの一五〇〇石の長崎廻米は、文政元年に同郡の高木作右衛門支配所村々が宗対馬守手当地渡しとなったため、同年より同国同郡の代官塩谷大四郎(惟寅)当分預所から廻米されることになった。

(447) 「辰四月申送書」(「豊後国日田郡代役所・申送書」)(村上直校訂『江戸幕府郡代代官史料集』、近藤出版社、一九八

一年、三〇九頁。慶応三年には、豊後国日田・玖珠両郡から一万七七〇七石一升一合、松浦郡中島村分二九二石九斗八升九合の計一万八〇〇〇石が長崎へ廻米された（『同』三二二頁）。なお、文化四年時点では、豊後米は一万六五〇〇石の廻米高であり、一万一五〇〇石が北瀬崎入用米に、五〇〇〇石が定式払米にあてられていた。

(448) 前掲『長崎県史』対外交渉編、四三一頁。

(449) 長崎会所に買い入れられ、地下役人への貸与米などに利用された米の代銀は、宝暦元年当時は四・五・六月の三ヵ月値段の一匁高とされた。しかし、同三年からは例年払米相場上値段の二匁高に変更されている。「長崎瀬崎御米蔵天保十亥年元払御勘定目録」（九州大学・九州文化研究所蔵『元山文庫』）には、「宝暦四戌年菅沼下野守相伺、例年十一月・十二月市中米相場平均値段金壹両ニ付六拾目替銀式匁増之積を以北瀬崎入用米ニ差加諸渡方ニ仕、代銀取立候様申渡」とある。なお、文化元年のロシア使節レザノフの長崎来航に際しては、同二年に天草米四斗入り一〇〇俵が御蔵米のうちから支給されたほか、天明元年・文化十二年には日本人漂流者護送の唐船に四斗入り二五〇俵が北瀬崎入用米のうちから渡された。

(450) 「長崎御用中記備」（東北大学附属図書館所蔵、狩野文庫『藤野記録』）。

(451) 前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録（一）」。延享二年・寛政四年・安政元年の内訳は不明。なお、文久元年の場合、長崎奉行支配組頭以下に支給された一九五八石五斗の内訳は、現米八〇石、役料四五〇俵（一五七石五斗）、切米四九一六俵四斗（二七二二石）である。このうち二六九七俵（一〇二三石九斗五升）は春夏渡り済みで、残米の半分は正米渡り、半分は御蔵相場一石に付き銀一四八匁八分で石代渡りであった。

(452) 九州大学・九州文化研究所蔵『元山文庫』。なお、この勘定帳には、ほかに異なった二つの史料が混入している。補修の際に誤って合綴されたのであろう。

(453) 堀伊賀守（利堅）・徳山石見守（秀起）は大坂町奉行、金井伊太夫・近山藤四郎は大坂御金奉行であった。阿部遠江守（正蔵）は天保十二年六月二十四日に普請奉行から大坂町奉行となる（堀伊賀守の跡役）。天保十年分の渡方銀のうち一四七三貫目余は天保十二年または同十三年に大坂御金蔵に納入されたものと考えられる。

(454) 前掲中村質『近世長崎貿易史の研究』三八二―三八六、五六三・五六四頁。大坂御金蔵へ納入すべき御米代銀は天保三年から同八年まで滞納されており、同期間中の未納総額は銀一万一二八九貫九七七匁に達した（前掲『元山文庫』の「長崎瀬崎御米蔵天保十亥年元払御勘定目録」に混入合綴された史料）。

(455) 前掲『長崎県史』対外交渉編、四二〇頁。

(456) 例えば長崎町年寄高木清右衛門の場合は、元禄七年に「長崎三カ村御地方并寺社方支配被仰付」としている(九州大学・九州文化史研究所蔵『松本文庫』の「由緒書」)。前掲『長崎県史』対外交渉編、四二〇頁。

(457) 前掲『長崎県史』対外交渉編(四二二頁)では、高木作右衛門が米方・寺社取計掛りとなった年を明和元年とするが、天明元年の誤り。九州大学・九州文化史研究所蔵『松本文庫』の「長崎町年寄発端并先祖代々相勤候由緒書扣」には、「天明元丑正月久世丹後守様御在勤之節、年寄共先年より相勤来候御米方并寺社方共高木作右衛門殿江以来掛被仰付候」とある。なお、長崎代官は、元和二年から延宝四年まで末次氏(平蔵襲名)が就任したが、同年一旦廃職となり、元文四年二月に高木作右衛門(忠興)が長崎奉行支配の長崎代官に任命されて再置された(以後維新时期まで代々高木氏が世襲代官となる)。

(458) 『慶応元年明細分限帳』(長崎歴史文化協会編、一九八五年)には、延宝四年から宝暦元年までは御米掛り手代は四人で勤めたとある。

(459) 仲使賃は、米蔵への搬入の場合欠過請負人(廻米業務や御蔵納めにともなう欠米処理を委ねられた請負商人)から支払われていたが、寛政四年以降は仲使賃銀のうちから支払われるようになった。また、諸渡方に際しての仲使賃については、切米扶持方の分は欠過請負人から、払米の分は落札商人から支払われており、「北瀬崎入用米」引受分についてのみ仲使賃銀から支払われていたが、同じく寛政四年よりいずれも仲使賃銀から支払われることになった。仲使賃銀は、長崎会所に納入するための「北瀬崎入用米」代銀を取り立てる際に、豊後米は一石につき銀四分五厘、肥後米・石見米・肥前米は一石につき銀四分ずつ取り立てられ(寛政四年以降、入札商人からも別段徴収)、前述の仲使の賃銀のほか、定式渡切諸雑用・御蔵修復費・銀三貫目以下の入用銀・臨時諸買物代などにあてられた。なお、仲使賃は、御蔵へ搬入の場合は、五斗入一俵につき錢五文宛、四斗入一俵につき錢四文宛、三斗入一俵につき錢三文宛であり、諸渡方のための御蔵場への搬出は、それぞれこの半額とされた。

(460) 前掲『慶応元年明細分限帳』(長崎歴史文化協会編)。なお、瀬崎御米蔵預り、御蔵番の支配・勤方に関しては、前掲『金井八郎翁備考録』第七・下、参照のこと。

(461) 以下、長崎御囲糶蔵については、「長崎諸取計方」(前掲『金井八郎翁備考録』第三・中)、「御囲米発端手続并銀差引書付」(九州大学・九州文化史研究所蔵『松本文庫』)、前掲『長崎県史』対外交渉編、四三〇頁によっている。この囲

米・粃買入資金は文政末年に一五八〇貫目余に達しており、寛政五年に粃米・粃買入資金のうちから銀一〇〇貫目を大村藩へ貸し付けたのをはじめ（月六朱の利息で廻米を担保）、文化六年からは柳川・唐津・平戸・鹿島・小倉の各藩への貸付も開始された（文政十二年時点での貸付総額は三〇九貫目余、その他小城・久留米・佐賀藩からの貸付銀返済未納分が四八四貫目余あった）。

(462) 前掲『長崎県史』対外交渉編、三九四頁。

(463) 前掲『長崎県史』対外交渉編、四〇九頁。なお、役料銀総額およそ三〇〇〇貫目余は幕末期まで維持されたので、切米扶持方等の給米支給高（銀高換算）は、慶応期を除き役料銀総額との対比において、およそその二割以内にとどまったものと推定される。

(464) 前掲中村質『近世長崎貿易史の研究』三〇四頁。長崎の人口は、寛永前期には約四万人となり、元禄中期には約六万五〇〇〇人のピークに達する。その後は減少して安永・寛政期約三万人となり、文政期以降二万六〇〇〇人〜二万九〇〇〇人前後で推移して維新时期に至っている（中村質『同』二〇八・二〇九頁）。

(465) 長崎会所の設立時期をめぐっては、元禄十年説と同十一年説とがあるが、ここでは会所の業務活動が本格的に開始された年という意味で、一応同十一年としておく。二説については、田谷博吉「長崎の銀座」（『日本歴史』二五七・二五八号、一九六九年）、前掲中村質『近世長崎貿易史の研究』三三四頁、太田勝也『鎖国時代長崎貿易史の研究』（思文閣、一九九二年）三六五〜三九九頁など参照のこと。

(466) 前掲『長崎県史』対外交渉編、四〇一・四〇二頁。

(467) 前掲『復古記』第一冊、六二九・七二三・七九〇頁。

(468) 前掲『復古記』第二冊、三九四〜三九六頁。

(469) 前掲村上直校訂『江戸幕府郡代官史料集』三二一頁。

(470) 田中圭一『佐渡金銀山の史的研究』（刀水書房、一九八六年）、二五五・二五六・二九二頁。

(471) 前掲田中圭一『佐渡金銀山の史的研究』二九七・二九八頁。

(472) 前掲田中圭一『佐渡金銀山の史的研究』二九八〜三〇〇頁。下戸米蔵については、「此節下戸御米蔵三軒も（須灰谷へ）御引被成候歟」（括弧内は引用者）とある（『同』三〇〇頁）。一方、『新潟県史』通史編3・近世一（一九八七年）、六二頁では、寛永後期以降にだいに銀産出量が減少し、慶安四年には出鉱不振の間歩はすべて閉山するよう命じられ、

「このため下戸の米蔵は破壊整理するに至った」とする。下戸御蔵は承応期に一時閉止された可能性もあるが、詳細は後考に委ねたい。

- (473) 「佐渡関係書」三(国立国会図書館所蔵)。なお、以下、佐渡御蔵に関する記述で、とくに注記のないものは同史料によっている。

- (474) 慶応元年の「廉書」(佐渡支配の概略を取り調べ目付織田市蔵へ差し出したもの)(『新潟県史』資料編12・近世七、一九八四年、一〇四―一一頁)によると、慶応元年の時点での米蔵は、米蔵三カ所(下戸・山之神のみ記されもう一カ所は明記されていないが、これは須灰谷)、大坂廻米蔵二カ所(夷湊・大石)、石田村屯所に一カ所、郷中囲籾蔵三カ所(河原田・城ノ越・大石)、非常備囲籾蔵四カ所(浦川・鷺崎・真更川・高下)であったとされる。大坂廻米用の御蔵は前記二カ所のほかに河原田御蔵があったが、文政末年頃より使われなくなった。なお、前掲『新潟県史』通史編4・近世二、七二六頁には、河原田御蔵は安永元年、夷湊御蔵は安永七年の建造とあるが、「御米蔵御用向取扱廉書」(前掲「佐渡関係書」三)には、それぞれ安永二年出来、安永八年出来とある。また、文政十一年には、大坂廻米用として大石御蔵に二六三三石、夷湊御蔵に三六三八石がそれぞれ納められた。須灰谷御蔵に付属した役所には「御判物其外諸書物・御道具等」も保管されていたため、御米蔵定番役・同並役のうちから一人が昼番を勤め、泊番は須灰谷御蔵・山之神御蔵・下戸御蔵とも御米蔵定番役・同並役のうちから一人と御蔵番(御米蔵番)一人が勤めた(山之神御蔵・下戸御蔵は、納払いがある時だけ役人が詰めて、通常は昼番がいなかった。このため御蔵番が度々見回ることとされた)。御蔵の普請については、寛政三年より「御蔵之御普請掛り」として、御金蔵役より一人、御米蔵役より一人、御雑蔵役より一人が命じられ、二人扶持ずつが支給された。さらに、大石御蔵は、文政十年までは御普請の御蔵とされ、小破損の場合は御米蔵定番役へ届け出て「御蔵御普請方小破御入用」で修理された。また、大破の場合は勘定所の指示を受けて修復された(同年以降百姓自普請となる、河原田・夷湊両御蔵は当初より百姓自普請)。

- (475) 佐渡代官を佐渡奉行と呼ぶようになったのは、鎮目惟明・竹村嘉理が就任した元和四年以降と考えられている(前掲『新潟県史』通史編3・近世一、五一頁)。

- (476) 「佐渡年代記一」(前掲『新潟県史』資料編9・近世四、一一頁)。

- (477) 「佐州諸役人御條目(八通)」(前掲『新潟県史』資料編9・近世四、二〇頁)。

- (478) 前掲『新潟県史』資料編9・近世四、六〇・六一頁。

(479)

御蔵番(御米蔵番)の倅(五人)には御払米一カ月五斗ずつが支給された。また、小揚の倅(九人)にも御払米一カ月三石ずつが支給された。小揚賃は納米一俵につき三文、納粗一俵につき二文四分とされた。なお、御蔵には百姓雇人足(例年六二人、うち人足頭三人)が付属して、米の搬出入などに従事した。

(480)

「佐渡年代記五」(前掲『新潟県史』資料編9・近世四、六九・七〇頁)。「御勝手御用留」第二冊(前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊・30』、三六〇頁)。この「御勝手御用留」には、御蔵の封印に関して「宝曆三十四年、御代官藤沼源左衛門佐州御蔵方取計被仰付候節、立合封印之儀佐渡奉行家来一人、御金蔵懸り地役人二兩人連封印付置候様可仕旨堀(堀田)相模守殿江伺之上源左衛門江申渡候」(括弧内は引用者)とある。これは佐渡蔵奉行病氣差合等の際の佐渡御金蔵に関する手続きと考えられるが、御米蔵封印についても類似の手続き(佐渡奉行家来一人、御米蔵掛り地役人一人の連封印)であったと思われる。なお、佐渡蔵奉行設置以後、御金蔵・相川御蔵の封印には、佐渡代官および佐渡蔵奉行が立ち会うことになっていた。

(481)

前掲「吏徴附録」(一四二頁)。「佐渡志」卷之六(山本修之助編『佐渡叢書』第二卷、佐渡叢書刊行会、一九五八年、九四頁)にも「宝曆十一年辛巳より明和七年庚寅迄十年の間此職を置れ、年ごとに俸米四拾石、俸金七拾両を賜はり、御勘定奉行に属して官稟府庫の出納を掌れり」とある。一方、「佐州年表」(前掲「蠹餘一得」三集・卷八、五一四頁)には、「佐州御蔵奉行一員を置 御役料現米七十石・御役金四十両 御勘定二人立合として遣ハさる年々交代の積」、さらに前掲「官中秘策」卷之四(『内閣文庫所蔵史籍叢刊・6』、八三二頁)には、「(佐渡)御蔵奉行同(御役料)四十石、同(御役金)四十両」(括弧内は引用者)とある。史料によって記載が異なるが、ここでは「吏徴附録」によっている。

(482)

大石御蔵については、宝曆十一年から明和五年七月までは、御蔵納めと大坂廻米の際に佐渡蔵奉行ならびに支配地役人が直接出向していた。また、相川御蔵については、佐渡代官も立ち会っていた。しかし、明和五年八月以降は、大石御蔵については御蔵奉行支配の地役人が出向き(佐渡蔵奉行は同行せず)、佐渡奉行支配地役人が立会連封印することになった(前掲「御勝手御用留」第二冊、三六〇・三六一頁)。なお、定番役は、寛政三年以前は五人のほか普請掛りの定役一人(三人扶持支給)がいたが、同年以降五人の兼帯となった。慶応四年の「佐渡分限帳」には、御米蔵定番役(定員五人、役扶持として五人扶持)、御米蔵役(定員九人)とあるから、文政期の体制がほぼそのまま継続されたことがわかる(前掲『新潟県史』資料編9・近世四、七四・九八頁)。

(483)

前掲田中圭一「佐渡金銀山の史的研究」二九二頁。

- (484) 前掲『新潟県史』通史編3・近世二、二八二頁。前掲田中圭一『佐渡金銀山の史的研究』二九一頁。
- (485) 「佐渡国略記」(前掲田中圭一『佐渡金銀山の史的研究』三二七・三二八・五一九・五二一頁)。
- (486) 「佐渡国略記」(前掲田中圭一『佐渡金銀山の史的研究』五二二・五二七頁)。「佐渡年代記四」(前掲田中圭一『同』五四四頁)。前掲『新潟県史』通史編4・近世二、七二五頁。
- (487) 前掲『新潟県史』通史編4・近世二、七二五頁。一方、「石谷備後守上書評議演説録」(筑波大学附属図書館蔵)(前掲田中圭一『佐渡金銀山の史的研究』五五三頁にも収載)には「享保十八丑年、窪田肥前守・萩原源左衛門他国御払米之義相伺候処、凶年之節国中夫食不差支程を相考、米高六千石迄ハ不及伺、其余ハ伺之上御払三仕候様こと之御下知之趣相見候」とあって、享保十八年以降は六〇〇〇石までが自由に他国払米できるようになったことがわかる。
- (488) 前掲田中圭一『佐渡金銀山の史的研究』三二二頁。前掲『新潟県史』通史編3・近世一、二八四・二八六頁。『同』通史編4・近世二、六二頁。
- (489) 前掲『新潟県史』通史編4・近世二、六二・六三頁。
- (490) 前掲『大坂町奉行所旧記』(下)、四五頁。前掲『新潟県史』通史編4・近世二、七一五・七一六頁。『佐渡相川の歴史』資料集七(一九七八年)、五八五・五八六頁。
- (491) 「甲辰雜記二」(前掲『日本財政經濟史料』第五卷上、一一〇・一一二頁)。
- (492) 前掲『新潟県史』通史編4・近世二、八〇・八二頁。
- (493) 前掲『新潟県史』通史編4・近世二、七八頁。
- (494) 「非常為御備御蔵御用糶」納入に際しての込糶は、蒸糶納入の有無などによって増減したが、寛政四年・六年・七年は五斗入り一俵につき二升、同五年・八年は一升、同九年以降は込糶を免除し、文化二年以降は蒸糶の納入(寛政九年以降は一五〇〇石のうち二〇〇石)を廃止したことにより再び一升を徴収した。なお、詰替古糶は、寛政八年・九年分は糶のまま他国払い、同十年分から享和元年分までは摺りたてのうえ地払い、享和二年分より文化八年分までは糶のまま他国払いされた。
- (495) 以下、慶応四年の佐渡国支配・情勢に関する記述は次の史料によっている。(一)前掲『維新史料綱要』巻八、三五・三〇六・三五〇・三七六・三七七・四七五・四九四頁。(二)前掲『新潟県史』通史編5・近世三(一九六八年)、七六〇・七七四・七七六頁。(三)前掲『大日本近世史料・柳営補任五』一五二頁。

(496) 「御役附并獵船旧記」・「清水湊旧記」(前掲『清水市史資料』近世一、四四九・六一三頁)。前掲『静岡県史』通史編3・近世一、二七七頁。

(497) 「文久元酉年、蒲原直積差止メ願書之下書」・「清水湊旧記」(前掲『清水市史資料』近世一、一一三・六三三・六三八頁)。なお、前掲『清水湊旧記』(『同』近世一、六三五・六三七頁)によると、享保九年以降(柳沢吉里の大和転封後)、向島御藏屋敷(柳沢家の拝領地、御藏四棟を含む)は、しばらくの間同藩の江戸廻米御用を勤めた清水問屋喜多村仁右衛門が屋敷守として管理したようである。そして、享保十六年には、御藏や付属施設が取り壊され、跡地は畑地になったとある。

(498) 「駿府廣益・前編中」(『静岡市史』中世・近世史料二、一九八一年、七二一・七二三頁)。なお、『清水市史』第一卷(一九七六年)、五九二頁では、清水御藏が享保期の米価対策・米価政策の一環として建てられたとしているが、誤りである。確かに、城詰米は米価対策としての機能も果たしたが、清水御藏が米価対策・米価政策を直接的契機として建てられたものではなかったことは本文で述べた如くである。なお、『清水市史』第一卷(五九二頁)では、清水御藏には蔵番二人が置かれ、給金三兩と三人扶持が支給されたと記す。

(499) 「覚」(前掲『長坂氏記録』第一六冊)。前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」。

(500) 前掲『日本財政経済史料』第一卷上、四七四・四七五頁。

(501) 前掲『清水湊旧記』(六二三頁)。前掲『静岡県史』通史編3・近世一、五一五・五一六頁。

(502) 前掲『清水市史』第一卷、六〇六頁。

(503) 前掲『駿府廣益・前編中』(七二二頁)。

(504) 「江尻旧記」(前掲『清水市史資料』近世一、四四五頁)。

(505) 天保十二年「書拔帳」(『丙午雜記』、前掲『日本財政経済史料』第十卷上、三二五・三七二頁)。

(506) 「旭日丸御船甲州御廻米御積立ニ付甲府御代官寺西直次郎様御手代増田繁七郎様江廻船宿り奉差上候書面之写」(前掲『清水市史資料』近世一、一〇四・一〇七頁)。

(507) 前掲『甲府市史』史料編・第五卷・近世IV、七二八頁。なお、同文の条項が岩淵河岸・蒲原河岸・清水湊の廻米請負議定書の中にある。甲州幕領年貢米の江戸廻米のために、前記三カ所には同じような管理体制をもつ「米置場」が置かれていたものと思われる。そして、天保四年にも同じ内容をもつ請負議定書が作成されている(『甲州三分御廻

米駿州三場所仕法議定書控」(『甲府市史』史料編・第五卷・近世IV、七二二～七三五頁)。

(508) 「乍恐書付を以奉願上候」(前掲『清水市史資料』近世一、二九二・二九三頁)。

(509) 前掲『静岡県史』通史編4・近世二、八〇四・八〇五頁。「御囲籾大豆有高」(前掲『吹塵録』上、二二三頁)。

(510) 「駿州清水御蔵建直目論見帳」(京都大学文学部図書館所蔵)。前掲『山梨県史』資料編8・近世1・領主、八八六頁。

(511) 前掲「御勝手帳」第二十六冊(五六頁)。

(512) 「清水御蔵御詰米籾直安御払下請摺立日記帳」(『静岡市史』近世史料三、一九七六年、五二五～五三〇頁)。

(513) 前掲『静岡県史』資料編16・近現代一、一五頁。

(514) 東海道先鋒総督府は、二月二十六日に赤心隊に駿府近傍の巡回・警備を命じていた(前掲『維新史料綱要』巻八、二六二頁)。

(515) 前掲、明治元戊辰年五月乙十二月迄「静岡并東京米金納払御勘定帳」(『徳川宗家文書』)。

(516) 美濃郡代の交代に際して、慶応三年十一月に美濃郡代岩田鉄三郎手代・手付から次の美濃郡代屋代増之助の手代に宛てた引継「演説書」のうち「御膳御廻籾御廻米一件」・「笠松・熱田御囲穀井村々貯穀一件」・「笠松新御囲籾一件」・「置稗御払代御貸付一件」(『岐阜県史』史料編・近世二、一九六六年、五六七～五九五、六六八～六七〇頁)、および「岐阜県史」通史編・近世上(一九六八年)、一〇五三～一〇六〇頁。以下、熱田・笠松両御蔵に関する記述でとくに注記のないものはこれらの史料によっている。

(517) 「元文三年名古屋図」四枚のうち第四号および「熱田神領字入図」(文化元年)(『名古屋市史』地図(一九一五年))。「吏事随筆」(『名古屋叢書』第三巻・法制編(二)、一九六一年、一二七頁)。深田増蔵(正韶)編「尾張志」(天保十四年)(徳川家編纂『尾張志』第壹号、博文社、九頁)。

(518) 前掲「吏事随筆」(一二七頁)。「吏事随筆」は、安永初年頃の成立で、編者は尾張藩国奉行所または代官所の役人とみられている。一方、前掲「尾張志」(九頁)は、「厚見草」に、白鳥の後の道を北へ行、右の方に御蔵あり、美濃国の御代官杉田氏預米錢を納、御上洛のとき当所御とまりの為とす、棟数多く、外には竹垣を結廻していみしく見えたりとあるはこの事なり」と記す。

(519) 延宝四年「所々御城米」(姫路市立図書館蔵『酒井家文書』、年号不知(貞享四年))「所々御城米并城付御米高」(前

掲「憲教類典」五之九(五四頁)。

(520) 「町触」(前掲『名古屋叢書』第三卷・法制編(二)、四七二頁)。

(521) 「癸卯雜記下」(『日本財政經濟史料』第八卷下、六〇八頁)。大垣藩預所「安永四末年御勘定目録」(前掲『岐阜県史』史料編・近世三、九六〇一〇四頁)。

(522) 近江信衆代官所「文政二卯年御勘定目録」(大野瑞男「幕府勘定所勝手方記録の体系―幕府財政史料の類型論序説(その一)」(『史料館研究紀要』第五号所収、一九七二年)により、信衆代官所分が判明する。享和三年には、伊達郡梁川領との替地で磐城平藩は美濃・三河国内に所領をもつことになったが、美濃国内では二万一五九〇石を領有した(はじめ三カ村・一万八〇九〇石で、同年中さらに葉栗郡・方県郡・本巢郡のうち一〇カ村三五〇〇石が加えられた)(文政三年時点でも美濃国内の所領高は変わりが無い(前掲『岐阜県史』史料編・近世三、三五九頁)。「福島県史」第3巻・近世2(一九七〇年、六六頁)では、磐城地方五六カ村二万七〇〇〇石、美濃四一カ村二万三〇〇〇石、三河五九カ村八〇〇〇石と記されるが、これは新田改出高を含んでの数値である。なお、文久元年八月・十一月に村替・上知が行われるなどして、元治元年以降は美濃国内の所領は一万八〇一八石余のみとなり、三河国内からは消滅した(『いわき市史』第二巻・近世、一九七五年、三三〇〜三三八頁)。

(523) 「美濃国葉栗郡笠松陣屋起立之事」(前掲『岐阜県史』史料編・近世二、一一四頁)。美濃郡代岡田将監(善政)は、承応二年正月八日に平岡石見守(頼資)が没したあと(平岡家の所領一万石は没収)、陣屋をそれまでの大野郡揖斐から可児郡徳野村(平岡石見守屋敷跡)に移した。慶安三年には洪水があり国役普請が行われたが、その際善政は「休息所」を美濃葉栗郡笠松村に設けている。なお、御膳料などを備蓄した笠松御囲蔵が建てられたのは寛文三年とされる(『同』通史編・近世上、一九五頁)。

(524) 美濃郡代または笠松代官の支配高は、享保十五年が美濃・伊勢国内に一四万五五二石余、宝暦七年が美濃国内に七万六八〇〇石余(他に同国内に預所一万二八〇〇石余)、寛政三年は八万三九二〇石余、天保九年は美濃・伊勢国内に一〇万一五四石余、慶応四年一月時点では美濃国内に一二万五九一四石余であった(前掲「御料高御代官并御預所高書付」(『日本財政經濟史料』第四卷上、五四三・五四四頁)、前掲大野瑞男「享保改革期の幕府勘定所史料―大河内家記録(二)・(三)」(『史学雑誌』第八〇編第二・三号)、天保九年「御代官并御預所御物成納御勘定帳」(前掲「吹塵録」下、一〇六頁)、寛政三年「美濃国高辻御領私領姓名并御朱印除地寺社書」(前掲『岐阜県史』史料編・近世二、四

八頁)、『岐阜県史』通史編・近代上(一九六七年)、一〇五頁)。

- (525) 御膳料の割賦が幕府勘定所からあると、笠松代官所をはじめ信楽代官所や大垣藩預所、飛騨郡代支配下川辺陣屋など美濃国幕領を支配した役所の役人が笠松陣屋に集まり、田方毛付高(植付高)に応じて配分したという。その後、寄合をせずに笠松代官または美濃郡代が各支配所毛付高を取り集め割賦するようになり、さらには前年の毛付高に応じて各支配所に仮割賦し、検見後に正式に配分をしたとされる(前掲『岐阜県史』通史編・近世上、八五〇頁)。

- (526) 前掲『岐阜県史』史料編・近世三、九六〇一〇四頁。なお、同史料には、安永二年分の熱田御詰料・御貯料とも、安永五年には新米(粃)に引き換えられて、江戸廻米されることになったとある。

- (527) 前掲『長坂氏記録』第十六冊。

- (528) 前掲「笠松・熱田御囲穀并村々貯穀一件」。なお、前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」には、「笠松御囲穀之儀、寛政二戌年御膳料仕法御改正之節、同三亥年より一ケ年粃千石宛三ケ年三三三石御詰料相成候処、四ケ年目村々江相渡新穀ニ引替、江戸御廻料ニ相成、其後追々詰戻取計申候」とある。しかし、前掲近江信楽代官所「文政二卯年御勘定目録」にも「寛政二戌年・同四子年同国村々御物成米之内を以笠松御囲穀之儀」とあるで、本文のように記述した。

- (529) 熱田・笠松両御蔵の囲穀高について、『吹塵録』には天保十四年十一月時点で二八〇〇石余とある(前掲『同』上、二二三頁)。この数値は、「濃州急難其外非常為御手当」囲穀と「置稗御払代御貸付」利金による囲穀を加えたものであると思われる。一方、前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」には、文久元年十二月時点で一九一石余(他に粃一三五石余、「損毛村々江相渡、可詰戻分」とあるが、この内容については不明である)。

- (530) 前掲『維新史料綱要』巻八、一〇七・一五〇頁。「東海道鎮撫総督府、名古屋藩二命ジテ笠松美濃国葉栗郡ヲ管セシム、是日其管理ヲ罷メ大垣藩ヲ以テ之ニ代フ、尋デ十七日大垣藩ヲシテ旧幕府飛騨郡代属吏ノ笠松ニ在ル者ヲ管セシム」とある。

- (531) 前掲『維新史料綱要』巻八、四六〇頁。なお、同月十八日には、名古屋藩士林左門・水戸藩士梅村速水を徴士兼内閣事務局権判事として笠松に在勤させるなどして体制が整った(『同』巻八、四六〇頁)。

- (532) 前掲『岐阜県史』通史編・近世上、二二八〇二三〇、二三八・二三九頁。『岐阜県飛騨国・大野郡史』中巻(一九二五年)、一一一・一二二頁。

- (533) 前掲『岐阜県史』通史編・近世上、一八三・二五一・二九〇・八七五頁。前掲『県令集覧』(四四六頁)。

(534) 前掲『岐阜県史』通史編・近世上、二五一・二九〇頁。『福井県史』通史編3・近世一（一九九四年）、二〇五・二一〇頁。

(535) 前掲『県令集覧』（六・七、一一四頁など）。

(536) 木村礎校訂『旧高旧領取調帳』中部編（近藤出版社、一九七七年）、五〇七頁。前掲『新訂増補国史大系・徳川実記』第五篇、寛文八年八月十日の条（二二頁）。前掲『福井県史』通史編3・近世一、二〇三・二〇四頁。

(537) 「飛州諸窺御証文写」（前掲『岐阜県史』史料編・近世二、七八四頁）。

(538) 前掲『岐阜県史』通史編・近世上、八六八頁。

(539) 「古川町史」付図・史料編四（一九八六年）。前掲『岐阜県史』通史編・近世上、八六八頁によると、享保六年時点での御蔵の規模は一間に六間（四戸前）とある（享保十三年に、二四間に一間半に建て替え）。「斐太後風土記」には、米蔵の鎮守としての稻荷社について、「増島城米倉の鎮守に請奉られしとなり。当昔の米倉は、今の官倉の一丁程南なり。城を壊せる時又一町許東菅原大神の傍に遷奉りけるとなむ」と記される（『飛驒古川金森史』、一九九一年、六七・六八頁）。

(540) 前掲『岐阜県史』通史編・近世上、八七〇頁では、享保六年「飛州三郡鄉村書拔帳」により在方郷蔵は三九カ所とする。他方、前掲「飛州諸窺御証文写」（七八九頁）では、正徳三年時点での在方郷蔵は三五カ所とする。史料・時期により郷蔵の数に若干の違いがみられる。

(541) 前掲「飛州諸窺御証文写」（七八八頁）。なお、前掲『岐阜県史』通史編・近世上、二五四頁によると、寛政期には船津・萩原・下原の各御蔵が廃止されたようである。

(542) 「飛州高山・古川御蔵修復冥加金上納之儀伺書」（『古川町史』史料編一、一九八二年、八八六・八八七頁）。

(543) 前掲「飛州諸窺御証文写」の中の「覚」（七八九〜七九二頁）。前掲『岐阜県史』通史編・近世上、二九一・二九二頁では、この「覚」を元禄十四年とし、二代飛驒代官伊奈半左衛門（忠順）の伺書としているが、これは誤りである。付札に記される幕府勘定奉行名から正徳三年のもの（三代飛驒代官伊奈半左衛門忠達）の伺書であると推定される。

(544) 前掲「飛州諸窺御証文写」（七九〇〜七九二頁）。

(545) 「飛州永統御取締之儀被仰渡取計方伺書」（前掲『岐阜県史』史料編・近世三、三七五〜三八七頁）。「地方演説書乾」

(前掲『岐阜県史』史料編・近世二、七九二～八五一頁)のうちの「御年貢之事」。前掲『岐阜県史』通史編・近世上、二五四頁。

(546) 前掲『岐阜県史』通史編・近世上、八七五頁。前掲「地方演説書乾」(七九五・七九六頁)。

(547) 「前掲『飛州諸窺御証文写』(七八四頁)、前掲「地方演説書乾」(八〇五頁)。

(548) 前掲「飛州永統御取締之儀被仰渡取計方伺書」(三七七頁)。

(549) 前掲「飛州永統御取締之儀被仰渡取計方伺書」(三七七・三八二頁)。前掲「地方演説書乾」(八〇五頁)。

(550) 前掲「飛州永統御取締之儀被仰渡取計方伺書」(三七五頁)。前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」。

(551) 前掲「吹塵録」上、二二四頁。前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」。前掲「飛州永統御取締之儀被仰渡取計方伺書」(三八五頁)。前掲「地方演説書乾」(七九七頁)。

(552) 前掲『岐阜県史』通史編・近世上、八七三・八七四頁。前掲「地方演説書乾」(七九四頁)。

(553) 前掲「地方演説書乾」(七九五頁)。

(554) 前掲「地方演説書乾」(七九五頁)。なお、古川御蔵の場合は、同御蔵組二四カ村が二カ村ずつ年番をたて、年番の村役人が御蔵の鍵を預かるなどした。

(555) 前掲「地方演説書乾」(七九四頁)。

(556) 前掲『岐阜県史』通史編・近世上、八八一～八八三頁。

(557) 前掲『岐阜県史』史料編・近世三、一三～一八頁。

(558) 前掲「飛州諸窺御証文写」(七八六頁)。前掲「地方演説書乾」(七九六・七九七頁)。

(559) 前掲『岐阜県史』史料編・近世三、二〇～二三頁。

(560) 前掲『岐阜県史』史料編・近世三、一八～二〇頁。

(561) 前掲天保十二年「書拔帳」(前掲『日本財政経済史料』第十卷上、二七三～二七五頁)。なお、越前国支配地からも、天保七年の年貢米が三国湊から江戸廻米されていたことが確認できる(前掲『福井県史』通史編3・近世二、二二二頁)。

(562) 岡本利平編『飛驒史料』維新前後之一、一九二七年、三八六・三八八・三九八頁。なお、前掲『維新史料綱要』巻八、一五一頁では郡代新見内膳(正功)の逃亡を一月二十八日としている。

(563) 前掲岡本利平編『飛驒史料』維新前後之一、四二三・四四一・四四四頁。前掲『維新史料綱要』巻八、一五一頁。

なお、東山道先鋒総督府は、二月二十四日には竹沢寛三郎に代えて梅沢速水を飛驒に派遣した。梅沢は、三月三日高山に至り、同月十三日には竹沢と交代して飛驒臨時取締となった(前掲『岐阜県史』通史編・近代上、六頁)。

(564) 前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』一〇八―一二〇頁。

(565) 前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』三四九頁。ただし、筑後国にも文化三年に幕領が置かれて(文化十三年以降は柳川藩預所)、幕末期には同所からの大坂廻米も行われた。

(566) 「丙午雜記」(『誠齋雜記』東京大学史料編纂所蔵)。江戸・大坂・二条・大津・駿府・清水・甲府・佐渡御蔵分については、大野瑞男氏も前掲『日本財政経済史料』第十巻上(二六六―四三五頁)に収載された同史料をもとに集計・作表している(前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』二五九・三四二頁の表24―Aと表36)。しかし、氏が作成した二つの表においても数値が食い違っており、また、『日本財政経済史料』には誤植も多いため原史料により再集計した。

(567) 別子銅山買請米は、宝暦十二年までは別子・立川両山へ一万二〇〇〇石が年貢米のうちから買請米として渡されていたが、同年に立川銅山師稼が潰れとなり、別子銅山に併合された。この結果買請米も別子へ五八〇〇石、立川へ二五〇〇石の計八三〇〇石となった。代銀は、国々所相場の二割安とされ、米渡月より一〇カ月延納とされたが、寛政九年より二割安が廃止され、以来国々上米値段で代金が入納されるようになった。但し、その代わりの手当として、銅山諸運上銀のうちから年々銀六九貫目が支給された(東北大学附属図書館、狩野文庫『藤野記録』のうちの「御用留」)。

(568) 前掲『日本財政経済史料』第十巻上、四六四―四八三頁。

(付記) 本稿作成にあたっては、横浜商科大学学術研究会より研究助成を受けた。